

学報

NARA MEDICAL UNIVERSITY

vol. **78** 2021
秋号

Special Feature

理事長・学長からの
メッセージ vol.21

Japan University English Model United Nations
(JUEMUN: 日本大学英語模擬国連)に参加!



Contents

特集

理事長・学長からのメッセージ vol.21	3
研究紹介	5
令和2年度計画の業務実績に関する評価結果	8
図書館だより	10
未来への飛躍基金だより	11
MBT研究所だより(第22報)	12
先端医学研究支援機構だより	13
国際交流センターだより vol.5	14
安全保障輸出管理への取り組み vol.4	16
看護部の紹介	17
働き方改革だより	18
Topics	19

Campus News

JUEMUN2021に参加!	20
AMED課題がスタートしました	21
MBT難病克服キャンペーンの活動について討議しました	21
国内外初の十二指腸癌診療ガイドラインが発刊されました	21
令和3年度第1回キャンパスミーティングを開催しました	21
コンソーシアム実習(奈良医大・早大連携講座)を開催しました	22
看護学科オープンキャンパス2021をWeb開催しました	22
難病克服支援MBT映画祭について議論しました	22
令和3年度自衛消防訓練を実施しました	22
厚生労働省令和3年度女性医療職等の働き方支援事業に選定されました	23
学長室にロボット「temi」(テミ)を設置しました	23
第一回MBT難病克服支援WEBセミナー開催しました	23
相分離制御破綻の機序解明	24
第5回LLPS研究会を開催しました	24
「第1回英語で学ぶ医学・看護学Webセミナー」を開催しました	24
福島県桑折町でMBT講演・意見交換会をしました	25
第74回解剖慰霊祭が執り行われました	25
第20回近畿・中部地区大学等知的財産連絡会議に参加しました	25
実験動物慰霊祭を執り行いました	25
シーズ集を発行しました	26
「難病克服支援MBT映画祭2021」を討議	28
血栓止血医薬生物学共同研究講座の報告会を開催しました	28
MBT感染対策支援コンサルティングを奈良医大発ベンチャー企業に認定しました	28
奈良先端大との連携活性化委員会を開催しました	28
難病克服支援MBT映画祭の公募を開始しました	29

Winner Report

第34回日本腹部放射線学会において打田賞を受賞しました	29
第232回日本内科学会近畿地方会で若手奨励賞(優秀演題賞)を受賞しました	29
第30回日本小児泌尿器科学会総会において会長奨励賞を受賞しました	30
日本生物学的精神学会学術賞を受賞しました	30
第28回中島佐一学術研究奨励賞の授賞式を開催しました	30
第10回奈良県立医科大学女性研究者学術研究奨励賞の授賞式を開催しました	31
第32回日本末梢神経学会学術集会で学会症例報告賞を受賞しました	31

寄附者ご芳名

「未来への飛躍基金」にご協力いただきありがとうございます	31
------------------------------	----

Information

令和4年度入試日程【医学部】	32
メディア掲載情報	32
編集後記	32

日本をリードする医科大学になるために

理事長・学長 細井 裕司

新型コロナウイルスについては、附属病院の医師、看護師、コメディカルの方々をはじめ皆様の努力で県民の方々に貢献でき、また外部からも高い評価が得られましたことに感謝申し上げます。9月には厚生労働省の依頼を受けた全国医学部長病院長会議から「今後の新興感染症等への検討に向けた新型コロナ対応についてのヒアリング」対象病院として奈良医大附属病院が推薦されました。推薦されました9大学病院は、弘前大、東大、日本医大、金沢大、藤田医科大、関西医大、奈良医大、岡山大、長崎大です。大学病院としてのコロナ対応や様々な研究成果が高く評価された結果であると考えています。

コロナに限らず、奈良医大が今後ますます発展するためには、大きく外部に飛躍することと、足元を固めること二つの要素が必要です。今回は、奈良医大の存在感を全国に発信するための社会貢献事業の一つ、そして足元を固めることとして、現キャンパスの将来を見据えて今行おうべきことを一つ取り上げたいと思います。

1. 難病克服キャンペーンの全国展開による社会貢献

本年5月から奈良医大とMBTコンソーシアムは、難病克服キャンペーンとして3つのプロジェクトの全国展開を始めました。

第1は、企業が選定した商品に協賛を示すロゴマークを添付していただいています。9月時点で、6社12品目が協賛商品に指定され、今後更に、吉本興業など大手企業数社の参加が予定されています。

第2は「難病克服支援WEBセミナー」です。難病診療連携拠点病院運営検討委員会委員長の本学杉江教授が中心となって企画していただき、9月4日14時から京都大学IPS細胞研究所の井上教授や患者会代表の織田様を演者として、WEBセミナーを開催し、医師、看護師などの医療の専門家、患者さん、その家族の方など約400名の方に視聴いただきました。

第3は、難病克服支援の映画祭2021の開催です。本学川口教授を中心に企画していただいております。全国から「みんなで守るいのち」をテーマに短編映画を募集し、2022年1月8日に橿原文化会館で授賞式を行います。図1の後援予定にありますように各方面から注目を集めています。12月10日まで募集していますので、皆様方からの映像作品の応募をお待ち申し上げます。

この三つのプロジェクトによって難病の患者さんの助けになることができ、奈良医大がその活動の全国中心になって社会貢献したいと思っています。

図1



後援予定団体

- ・厚生労働省
- ・奈良県
- ・関西文化学術研究都市推進機構
- ・2025年日本国際博覧会協会
- ・関西経済同友会
- ・日本経済団体連合会

映画祭開催

第1回 2022年1月8日 橿原文化会館
その後も継続的に映画館(大規模ホール)で上映

2. 新外来棟の高さ制限緩和への挑戦

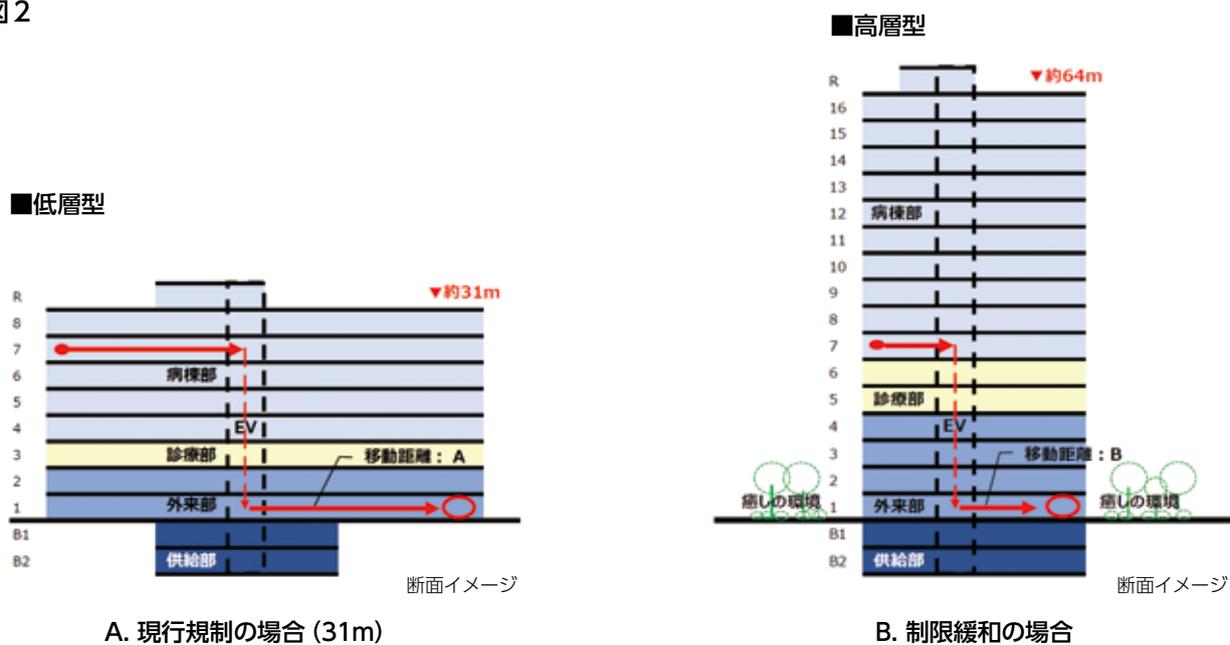
奈良医大キャンパスは現行の場合高さ制限は 31m です。この高さ制限では、8 階建てのビルしか建てられません。8 階しか建てられないと問題は二つあります。一つは、狭隘な敷地を大きく占有すること、もう一つは、医療従事者や患者さんの動線が長くなることです。もし、16 階の建物を建てることができたと仮定して、8 階との比較を図 2 に示します。向かって右側に示すように、利用可能な面積が増加します。また、医療従事者や患者さんの負担軽減になります。

このような理由から、新外来棟の設計に入る前に、医大ならびにその周辺の高さ制限緩和に挑戦したいと思っています。挑戦という大層な言葉を用いましたのは、もう何十年の間高さ制限の緩和はできなかったからです。反対の意見が強かったのかもしれませんが、誰かが高さ制限緩和に挑戦したという話も聞いたことがありません。その間、ABCDE 棟が 8 階止まりで建設されてきました。新外来棟の設計に入る前に、誰かがこれを問題として取り上げなければ、新外来棟だけでなく、続いて整備されるすべての建物において高さ制限が足かせとなり、数十年後も 8 階が最高の低階層病院になってしまうことを危惧しています。

『単なる希望』ではなく、戦略を持って反対する人を説得し、この問題に挑戦していきたいと考えています。「命の大切さと、医療機関の大切さ」を訴えていきたいと思っています。

効率の良い新外来棟建設のために、高さ制限の緩和に『挑戦』

図 2



移動距離のイメージ：A>B ※Bの方が水平方向の移動が少ない



A. 現状のまま (8 階) の場合



B. 高さ制限緩和 (16 階) の場合

有効活用スペース：B>A ※Bの方が有効スペースが広い

駆け抜けた40年： 素晴らしい恩師と掛け替えのない仲間へ感謝！



循環器内科学 齋藤 能彦

私は、1981年奈良県立医科大学を卒業し、京都大学で研修を開始しました。

京都大学附属病院での1年間の臨床研修後、浜松労災病院で循環器医としてのトレーニングを受け、1985年に京都大学内科第二講座に帰学しました。最初に私が心血を注いで研究したのが、「ナトリウム利尿ペプチド研究」でありました。当時心臓がホルモンを分泌していることは大変センセーショナルでしたが、私は、Atrial Natriuretic Peptide (ANP) の利尿作用や血管拡張作用に注目し、ANPの心不全治療薬としての可能性を検討し、世界に先駆けてその有効性を報告することができました。この結果は憧れのCirculation誌に掲載されました。その後、脳で発見されたBrain Natriuretic Peptide (BNP) も心臓ホルモンであり、ANPやBNPが心不全の診断薬としても有用であることを発表しました。

その後、自分でもANPのような生理活性物質を発見したくなり、ANPの発見者である松尾壽之先生(当時松尾先生は国立循環器病センター研究所長)の下に国内留学し、5年間未知の生理活性物質の探索に没頭しました。結局新規の物質の発見はできませんでしたが、生化学的素養を習得することや、本物の基礎研究者の実力に触れることができ、本当に良い経験を積むことができました。

その後、京都大学に帰学し、自分のグループを率いるようになりました。新しく発見されていたCardiotrophinの心室リモデリングに対する役割、ANP遺伝子やBNP遺伝子が心不全時に発現亢進する分子機序を解明し、さらに、ANP、BNP共通の受容体であるGC-A (Guanylyl cyclase-A) の遺伝子欠損マウスを用いて、ANPの病態生理的意義の解明に取り組み、ANP系の心保護作用を証明することができました。

2002年に母校である奈良医大で働く機会に恵まれましたが、奈良医大の臨床的デューティーの多さを鑑み、臨床活動から得られる知見に、それまで私が培った基礎的スパイスを加味した研究スタイルを目指す事にしました。そして、臨床においては「症例を断らないこと」、研究においては「嘘をつかないこと」をモットーにしました。力を入れた研究テーマの一つには、教室に心臓グループと腎臓グループの双方が存在したこともあり、当時新たな概念として注目されていた心腎連関の分子機序に関する研究を取り上げました。その結果、VEGFのファミリーの1つで、血管新生や炎症に関与しているPlacental Growth Factor (PLGF) の産生が腎不全では増加すること、さらにPLGFの受容体であるFms-like

tyrosine kinase 1 (Flt-1) のアイソフォームである可溶性Flt-1 (sFlt-1) が (sFlt-1はPLGFに拮抗的に働く)、腎不全では産生が低下することにより、PLGFとsFlt-1のバランスが破綻し、その結果相対的にFlt-1系が活性化することが、腎機能不全時に観察される動脈硬化の重症化や、心不全易発症性に関与していることを世界で初めて提唱することができました。

この他、臨床介入研究、臨床観察研究、ビッグデータを用いた臨床研究にも力を入れました。

当時熊本大学循環器内科教授であった小川久雄先生との共同研究で低用量アスピリンの糖尿病症例における心血管イベントの1次予防効果を全国規模で検討したJPAD研究を実施しました。また、奈良医大の豊富な冠動脈疾患を対象に、光干渉断層法(OCT)による冠動脈内血管イメージング装置を世界に先駆けて導入し、不安定プラークの診断法やOCTガイド冠動脈インターベンション法の技術革新を行い、最近では人工知能によるOCT自動診断技術の開発にも成功いたしました。また、世界最大の激症型心筋炎のレジストリーを全国235施設のご協力を得て構築することに成功しました。その他、奈良医大に入院された心不全や急性心筋梗塞症例の全症例登録研究(NARA-HF研究、NARA-MI研究)を実施し、数多くの臨床エビデンスを発表してまいりました。その他、日本循環器学会の登録研究であるJROADや厚労省のNational Data Baseや、県のKokuho Data Baseなどビッグデータを用いた解析にも取り組み、循環器疾患の医療費の実態、専門医数と予後の関係など医療体制の改善に資するエビデンスを構築してきました。

これら一連の研究実績により、2021年第85回日本循環器学会を主催させて戴く幸運に恵まれました。また、2022年には国際心臓研究学会のpresidentに就任予定であります。これらの業績は、ひとえに、井村裕夫先生、中尾一和先生、松尾壽之先生、寒川賢治先生、泰江弘文先生はじめ多くの得難い恩師からのご指導の賜物であり、京都大学での中尾研、613研の素晴らしい仲間、そして、奈良県立医科大学第一内科(現在循環器内科)のすべての医局員の努力と、ここでは書ききれない多くの共同研究者皆様の献身的なご協力のお陰であります。この紙面を借りて御礼申し上げます。医科学を追求する場として、自由な発想と小手先ではなく本物を追求する気概、そして、それらを醸成する気風が大学には必要だと思います。奈良医大がますます発展されることを祈っております。

Oncologist を目指して歩んだ 40 年



放射線腫瘍医学 長谷川 正俊

定年退職を前にして、研究について紹介する機会をいただきましたので、放射線腫瘍医学講座において取り組んできた基礎研究とその臨床応用、臨床研究等を中心に概要をまとめさせていただきます。

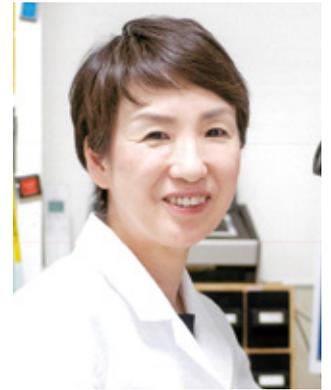
私自身の研究の原点は学生時代の腫瘍病理学です。1976年に群馬大学医学部に入学して間もないころから、腫瘍学者 (oncologist) 目指して、まず6年間、病理学教室をはじめとする複数の教室で、脳腫瘍、その他の腫瘍病理学や腫瘍免疫学等を勉強させていただきました。1982年に医学部を卒業後の6年間は、病理学教室において、人体病理学 (臨床病理学全般、特に脳腫瘍の病理形態学) と実験病理学を学ばせていただき、脳腫瘍について免疫組織化学や電子顕微鏡による検討を行いました。1988年以降は、現在の専門である放射線腫瘍学の分野において、臨床に従事しながら、臨床腫瘍学と放射線生物学の研究を行っており、特に2005年からの17年間は本学において、臨床、教育、その他の業務に埋没しながら、研究もなんとか継続してきました。

基礎研究の分野では、以前から取り組んできた腫瘍病理学をベースにして、精原細胞等の p53 依存性放射線誘発アポトーシス、脳腫瘍における放射線誘発アポトーシス、腫瘍幹細胞と放射線感受性、さらに Linear-Quadratic (LQ) モデルに基づく分割照射の比較、粒子線治療と X 線治療の比較に関する放射線生物学的～分子生物学的解析 (生物学的効果比 RBE の検討、照射後の遺伝子発現の検討等) を行ってきました。1982年から現在に至るまでの40年間、自身で確立したヒト由来脳腫瘍のヌードマウス可移植モデルを使用した動物実験を継続しており、上記のような研究に加えて、in vivo における種々の殺細胞性抗癌剤、分子標的薬と X 線、重粒子線の併用効果の検討も行ってきました。さらに、近年は本学の陽子線がん治療研究センター (高槻会高井病院内に設置) において、陽子線の放射線生物学的および物理学的研究 (RBE、放射化、他) に

も取り組んでいます。これらの研究では、終始、自身で腫瘍の移植から照射実験、種々の解析に取り組んできましたが、近年は、多くの研究生、大学院生、教員の先生方 (宇都、辻、吉峰、藤谷、森 (俊)、井上 (和)、三浦、森 (英)、他多くの先生方)、研究補助員、他の関係者の皆様、さらに動物実験施設、高井病院、放射線医学総合研究所等の皆様にもご協力いただいて現在に至っています。ご協力ありがとうございました。なお、これらの基礎研究には臨床研究への応用、いわゆるトランスレーショナルリサーチ的な面もあり、特に分割照射の基礎研究は臨床例での検討にも反映しています。

臨床研究では、原発性・転移性脳腫瘍、悪性リンパ腫、肺癌、前立腺癌、その他の高精度放射線治療、画像誘導放射線治療に関する臨床腫瘍学的、放射線腫瘍学的研究に携わってきました。特に原発性、転移性の脳腫瘍については、代表的な高精度治療である強度変調放射線治療 (IMRT/VMAT) や定位放射線照射 (STI) をベースにして、治療法の個別化に取り組んできました。基礎研究の応用も考慮の上で、放射線治療における種々の線量分割と、標的に合わせて放射線強度を変えた線量分布を組み合わせて検討し、LQ モデルを応用した EQD2 (2Gy 等価線量換算値)、EQD2 に換算した線量分布、線量体積ヒストグラム (DVH) で評価してきました。さらに、脳腫瘍、リンパ腫、肺癌、前立腺癌、その他においては、学内外の各科 (脳外科、呼吸器内科、泌尿器科、消化器外科、整形外科、他) の多くの先生方にご協力いただいて、高精度放射線治療、画像誘導放射線治療、その他に関連する臨床腫瘍学的検討を行ってきました。特に、玉本、浅川、三浦、若井、井上 (和)、八巻、岡田、下田、梶谷、井上 (正)、森本、猪岡、新木本、松田 (脳外科)、田中 (泌尿器科)、本津 (呼吸器内科)、他の多くの先生方には、ほんとうにお世話になりました。ご協力ありがとうございました。

『病理診断学の転換期にあって』



病理診断学 大林 千穂

40年ぶりに母校に帰り、慣れぬ教育と研究に忙殺された日々は瞬間に過ぎ去り、10年足らずの教授職を終えようとしている。その間、研究成果として誇れるほどの収穫はないが、次世代に繋ぐ土台作りを紹介させていただく。

私の専門領域は肺癌の病理診断であるが、思えば、その芯となったのは20代での聖路加国際病院での研修と、30代以降の神戸大学・兵庫県立がんセンターでの呼吸器グループのカンファレンスである。当時の聖口力は山中晃先生の意見を求めて多くの臨床医がコンサルトする炎症性肺疾患のメッカであり、出来の悪い研修医の私でも門前の小僧として少しは経を讀める様になった。神戸では肺癌に関わる全診療科が参加し、全例カンファレンスが行われ、その全てを自ら診断し、臨床医との共同研究を行った。肺癌は悪性度の高い、しかも組織採取が難しい癌腫であり、病理医は微小な検体でいかに正確に診断するか、専門性が問われる領域である。この10年間で肺癌治療は様変わりし、それに伴い臨床医が病理医に求める情報も変化してきた。私が病理診断学講座教授として着任したのはそういった大転換期であった。薬物治療のトップランナーである肺癌に求められていた遺伝子や免疫チェックポイント阻害薬判定はすぐに多くの領域に拡大することが予測され、臨床からの多種多様な要望に中央診療部門として答えていく体制作りという診療科として責任とともに、講座を牽引していく方向性を示さなければいけなかった。外では肺癌取り扱い規約の病理組織委員長として第7版組織分類改訂を纏めるとともに、内では遺伝子診断に舵を切った。全国に先駆けて切除臓器の処理、凍結検体を採取・保存する「病理遺伝子解析ユニット」を整備し、研究室にはNGSをはじめとする分子診断機器を整えた。ハンディーな機種ではあるが、NGSのインパクトは病理医を覚醒させるに十分であった。今では医局員が専門とする領域ごとに遺伝子パネルをオリジナルで作り、様々なデータを得ている。ゲノムはミクロ、そしてマクロへと連結する訳

で、これを一気に通貫する病理医にとって、ゲノムは日常診断で経験する「不思議」を解決する重要なパーツであり、興味が尽きない。

この様に言えば、私がどれ程遺伝子診断に精通しているかと思われるだろうが、30年間は膨大な診断業務に明け暮れ、教授になって初めて、研究的な視点を持ったのである。古典的形態学しか知らない私が危機感とともに、新たな診断学への好奇心に衝き動かされたのだ。100年以上に及ぶHE標本のアーカイブズは決してゲノムと不連続のものではない。我々の講座で取り組んでいる研究の一つを挙げる。人の組織の中で、類似した場面が異なる部位に存在することがしばしばある。例えば中皮細胞は全臓器を包み、体腔を形成し、髄膜細胞は脳を包み髄腔を形成し、この二種類の細胞には機能や形態に共通点があり、そこから発生する腫瘍にも似たところがあり、以前から興味深く感じていた。これは病理医ならではの視点であろう。そして近年、これらの細胞由来腫瘍に共通してTRAF7遺伝子変異が報告された。中皮良性腫瘍であるadenomatoid tumorは偶発病変であり、臨床的意義は少ないが、病理形態学的には大変興味深く、しかも我々は日常診療で多数例を蓄積していたため、直ぐにTRAF7が高率に変異していることを確認し、臨床病理学的論文として報告した。勿論、この解析にもNGSが活躍した。TRAF遺伝子はNF- κ Bシグナル伝達経路におけるE3をコードする遺伝子で、TRAFファミリーの最後のメンバーであるTRAF7は、未だその機能やその変異がもたらす腫瘍発生の機序は不明であり、現在、中皮細胞や髄膜細胞での機能解析を進めている。この様に、日常臨床で温めていた疑問や形態学的興味を分子レベルで紐解いていく面白さを味わうことができるようになった。今や、若い医局医を多数抱える活気あふれる医局になり、今後もしサーチマインドを持ちつつ、決して楽ではない日常診療に当たってほしいと願っている。

令和2年度計画の業務実績に関する評価結果

第3期中期計画の2年目にあたる令和2年度計画の業務実績について、県の評価委員会による評価結果が通知されました。

第3期中期目標では、「地域貢献」、「教育」、「研究」、「診療」、「法人運営」の5つの柱立てのもと価値目標を掲げ、それぞれに具体的な実現目標が定められています。

令和2年度計画は、新型コロナウイルス感染症により、当初の計画で予定していた取組が実施できない、または十分な実施ができなかったために成果があがらなかったなど、大きな影響を受けました。しかし、現行の評価基準では新型コロナウイルス感染症のような予期せぬ事態を考慮した評価体系となっていないため、従前どおり実施要領に基づく評価基準により価値目標項目別評価及び項目別評価を行ったうえで、全体評価として、新型コロナウイルス感染症に関する法人の貢献を考慮し評価することが評価委員会で決定されました。それにより令和2年度計画は、「順調に実施している」と判断され、中期目標・中期計画の達成に関して、全体として「順調に進んでいる」と評価を受けました。

令和3年度は、第3期中期計画（令和元年度～令和6年度）の3年目にあたります。いまだ新型コロナウイルス感染症収束の見通しが立たず各分野において様々な対応が求められる状況ではありますが、第3期中期目標・中期計画の達成に向け、引き続き皆様のご理解と積極的なご参画をお願いいたします。

令和2年度 評価結果の概要

全体評価

中期目標で掲げる7項目（Ⅰ.地域貢献＜教育関連＞、Ⅰ.地域貢献＜研究関連＞、Ⅰ.地域貢献＜診療関連＞、Ⅱ.教育、Ⅲ.研究、Ⅳ.診療、Ⅴ.法人運営）のうち、「地域貢献＜研究関連＞」及び「研究」については、「**中期目標・中期計画の達成に向けて特筆すべき進行状況にある**」、「地域貢献＜診療関連＞」及び「法人運営」については、「**中期目標・中期計画の達成に向けて順調に進んでいる**」、その他の項目については、「**中期目標・中期計画の達成に向けておおむね順調に進んでいる**」と評定し、年度計画で定めた事業を順調に実施していると判断した。

以上のほか、新型コロナウイルス感染症の対応として、「組織体制の整備」、「診療（附属病院）における対応」、「研究部門における取組」、「教育部門における取組」において、当初の計画に予定のない取組を行い、県民を守る「最終ディフェンスライン」として多大な貢献をしたことに加え、こうした状況下にもかかわらず、年次有給休暇の取得や超過勤務時間の縮減等を行い、働き方改革を推進した点や共同研究をはじめとした研究件数を伸ばした点、繰越欠損金の縮減を実現した点なども踏まえると、公立大学法人奈良県立医科大学の令和2年度の業務実績については、「**中期目標・中期計画の達成に関して全体として順調に進んでいる**」と認められる。

また、今回、新型コロナウイルス感染症の対応により得られた経験や知見については、教育・研究・診療の各分野の今後の取組に寄与させるよう尽力されたい。

項目別評価

Ⅰ. 地域貢献＜教育関連＞

年度評価：Ⅲ（中期目標・中期計画の達成に向けておおむね順調に進んでいる）

注目される取組（評価の高い事項）

◇へき地の医療機関や特定の診療科等に従事する医師の養成・確保を目的として、奈良県が修学資金の貸与を行った学生である県費奨学生の義務履行の理解促進のため、個別面談を適宜実施し、学習支援やキャリア形成をサポートした。など

課題

◇看護学科卒業生の保健師県内就業者数は第3期期間平均4名となり、目標（平均6名）を達成できなかった。

Ⅰ. 地域貢献＜研究関連＞

年度評価：Ⅴ（中期目標・中期計画の達成に向けて特筆すべき進行状況にある）

注目される取組（評価の高い事項）

◇各市町村の健康づくり推進協議会等に参画し、「健康増進計画」の立案、見える化や評価について助言を行った。など

Ⅰ. 地域貢献＜診療関連＞

年度評価：Ⅳ（中期目標・中期計画の達成に向けて順調に進んでいる）

注目される取組（評価の高い事項）

◇附属病院救急科主催で奈良県救急搬送及び医療連携協議会の「搬送に関する部会」を書面により開催し、搬送に関する基準について検討するなどした結果、中南和地域における重症以上の傷病者搬送事案において医療機関に受入の照会を行った回数4回以上の割合が1.94%と目標を大幅に下回った。

◇新たにDMAT隊員を養成するため、附属病院の職員3名（業務調整員1名、看護師2名）が厚生労働省主催のDMAT隊員養成研修を受講し、1チーム増加（令和元年度から累計3チーム）した。など

II. 教育

年度評価：Ⅲ（中期目標・中期計画の達成に向けておおむね順調に進んでいる）

注目される取組（評価の高い事項）

◇臨床医学教育における様々な課題を検討するため、各講座（部門）で中心となってコーディネートする教員をそれぞれ1名選出し、医学部長が任命を行う「教育主任」制度を創設した。など

課題

◇Post-CC OSCE については、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、本試験を中止とした。

◇新型コロナウイルス感染拡大の影響により、リサーチ・クラークシップをはじめとした国内外の施設での研修及び臨床実習等を中止した。

III. 研究

年度評価：V（中期目標・中期計画の達成に向けて特筆すべき進捗状況にある）

注目される取組（評価の高い事項）

◇法人の研究支援体制を強化するため、研究の入口段階から出口段階までを包括支援する先端医学研究支援機構を新設し、その構成として医学研究支援センター、産学官連携推進センターに加え、研究力向上支援センターを新設した。など

IV. 診療

年度評価：Ⅲ（中期目標・中期計画の達成に向けておおむね順調に進んでいる）

注目される取組（評価の高い事項）

◇新型コロナウイルス感染防止等のため、患者のスマートフォン等でQRコードを読み取ることで、院外、院内を問わず、どこで待っていても会計や調剤の進捗状況が確認できるシステムの運用を開始した。など

課題

◇認定看護師の資格取得者は令和元年度から3名増加の累計4名となり、目標（令和元年度から累計6名増加）を達成できなかった。

V. 法人運営

年度評価：Ⅳ（中期目標・中期計画の達成に向けて順調に進んでいる）

注目される取組（評価の高い事項）

◇超過勤務命令の法令上限および36協定の遵守徹底等を含めた勤務時間管理の適正化について、各所属長に対し通知するなどの取組により、看護師・医療技術職・事務職の超過勤務時間数が縮減した。

◇看護職ワーキンググループにおいて業務見直しに向けた取組を実施するなどの結果、看護師離職率は全国平均と比べ4.2%低かった。など

評価結果は大学ホームページに掲載しています。

<https://www.narmed-u.ac.jp/university/gaiyo/kekaku-hyoka/gyomujoho2/gyomujoho2.html>
(大学 HP > 大学概要 > 大学の計画と評価 > 業務に関する情報 > 業務実績評価結果)

奈良県公立大学法人奈良県立医科大学評価委員会 委員名簿

氏名	役職等
今中 雄一	国立大学法人京都大学大学院医学研究科 医療経済学分野 教授
◎垣内 喜代三	国立大学法人奈良先端科学技術大学院大学 名誉教授
竹田 幸博	一般社団法人日本呼吸器学会 事務局長
任 和子	国立大学法人京都大学大学院医学研究科 生活習慣病看護学分野 教授
堀 正二	地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪国際がんセンター 名誉総長

(五十音順 敬称略 ◎は委員長)

検索マスターへの道 (第17回) 医中誌豆知識

国内の医学文献検索といえば、医中誌。2021年から同時アクセス数無制限・リモートアクセス対応にしたことにより、今まで以上に使われている方も多いと思います。特に説明がなくてもスムーズに使えるわかりやすいデータベースですが、実は意外と知らないことも隠れています。今回は、知っているのと医中誌をより便利に使いこなすことができる豆知識をご紹介します。

★シソーラスを使う

医中誌を検索すると、自分で入れたキーワード以外に検索タグ〔/TH〕のついたキーワードが加わることがあります。この〔/TH〕はシソーラス(Thesaurus)を意味します。シソーラスとは、同義語をまとめた統制用語のことです。例えば「褥瘡」は、文中で「褥創」や「床ずれ」といった表現がされることもあります。医中誌ではそういった褥瘡に関連する文献に「褥創性潰瘍」という共通のシソーラスを付与しています。検索者はシソーラスで検索することにより、関連する文献を幅広く検索することができます。

また医中誌では、自分で思いついた「褥瘡」というキーワードで検索すると自動的に「褥瘡性潰瘍」というシソーラスを付与してくれる「自動マッピング機能」があります。この機能により、思いついたキーワードの文字列検索にシソーラス検索が加わり、より網羅的な検索となります。自分で入れたキーワードには〔/AL〕、シソーラスには〔/TH〕がついています。

#1 (褥瘡性潰瘍/TH or 褥瘡/AL)

どのようなシソーラスがあるかを調べるには、検索画面上にあるタブ「シソーラス参照」を使います。「シソーラス参照」の検索ボックスに自分で思いついたキーワードを入れ、「検索」をクリックします。下に候補語の一覧が出てくるので、使いたいシソーラスをクリックします。「医中誌 Web で検索する」と「キーワードの詳細情報を見る」のどちらかを選びます。「キーワードの詳細情報を見る」を選ぶと、シソーラスの同義語や上位語・下位語を確認できます。

The screenshot shows the JAMA Search Thesaurus interface. At the top, there is a search bar with the keyword '褥瘡' (褥瘡). Below the search bar, there are several tabs and buttons, including 'シソーラス参照' (Thesaurus Reference) and 'シソーラスブラウザ' (Thesaurus Browser). The main area displays a list of related terms, with '褥瘡性潰瘍' (褥瘡性潰瘍) selected. The interface also shows options for '医中誌 Web で検索する' (Search on JAMA Web) and 'キーワードの詳細情報を見る' (View keyword details). The bottom part of the screenshot shows a table of related terms, including '褥瘡性潰瘍' (褥瘡性潰瘍) and '褥瘡' (褥瘡).

シソーラスを使うと、同義語を含めた広い検索ができます。検索の際は思いついたキーワードと一緒にぜひシソーラスをお使いください。

なお、シソーラスとは別に「医中誌フリーキーワード」があります。シソーラス用語には含まれないながらも重要なキーワードとして文献に付与されています。自動マッピングでは〔/TH〕がつきます。シソーラス用語と異なる点としては、カテゴリ分類、階層化されていません。

#1 (体圧/TH or 体圧/AL)

The screenshot shows the JAMA Search results page for '褥瘡 UPDATE エキスパートのための最新情報と栄養療法' (褥瘡 UPDATE Expert information and nutrition therapy for the latest information). The page shows the author '金丸 亜希' (金丸 亜希) and the source '臨床栄養 (0485-1412)138巻6号 Page1020-1025(2021)'. The page also shows the 'シソーラス用語' (Thesaurus terms) and '医中誌フリーキーワード' (JAMA Free Keywords).

★論文種類「原著論文」「会議録」に要注意

「原著論文」は、「獨創性・新規性のある文献」と定義付けされていますが、文献一件ずつその定義で医中誌が精査して論文種類が分けられているわけではなく、医中誌の取雑誌に掲載されていて、目的、対象、方法といった構成の文献であれば「原著論文」とされています。医中誌でいう「原著論文」とは、そのほかの論文種類である、解説、総説、会議録、座談会などに当てはまらないものと考え、あまりこだわらないことをお勧めします。「こういう調査法の文献を探したい」というときは、シソーラス「調査研究法」の下位語に含まれる様々な調査研究方法のシソーラスなどを活用しましょう。

また「会議録」にも注意が必要です。わざわざ取り寄せた本文が1ページにも満たず短かったということはありませんか？論文種類の中には学会等で配布される抄録集掲載の「会議録」があります。「会議録」は医中誌データの半分以上を占めているため、検索結果にかなり多く含まれています。「会議録」は情報量としては少ないため、たくさん文献がヒットしている時は除外して見ることをおすすめします。「会議録」は論題の末尾に(会議録)とあるので、まず確認してください。

★キーワードは部分一致検索になる

医中誌で思いついた単語を入力して検索すると部分一致で検索されます。例えば、画像診断の「CT」と検索すると、文献情報のどこかに「ct」という文字列を含むもの、「effects」、「affect」、「rejection」などもヒットしてしまいます。また「浸潤癌」と検索すると、反対の意味の「非浸潤癌」も文字列が部分一致するため検索結果に含まれます。検索するときは、シソーラスを使う、ほかのキーワードをかけ合わせるなど、必要のない文献を検索結果から除くための工夫が必要です。

ただ、部分一致は便利な機能でもあります。例えば前立腺の摘除術は、「前立腺摘出」、「前立腺摘除」、「前立腺摘除術」などの同義語がありますが、「前立腺摘」と検索すればそれらはすべて含まれます。

検索キーワードは水色でハイライトされているので、検索結果をざっと見て自分の意図に沿ったキーワードで検索されていることを確認するとよいでしょう。

意外と知らない医中誌豆知識、いかがでしたか？これらを知っておけば、使い勝手のよい医中誌をより効率的に検索できるので、ぜひお役立てください。

【参考文献】1) 医中誌 Web ホームページ <https://search.jamas.or.jp/>

2) 医中誌 Web 検索ガイド <https://www.jamas.or.jp/user/guide/index.html>

未来への飛躍基金だより

高度シミュレータ購入事業のご紹介

未来への飛躍基金担当学長補佐 消化器内科学 吉治 仁志

今回未来への飛躍基金を活用して医師向けの高度シミュレータを充実します。文部科学省感染症医療人材養成事業により購入したシミュレータと合わせて総額2億円弱の高度シミュレータ機器が本学に設置されることとなりました。全国的にもこれだけの機器を一度に揃えた施設は少なく、今後の卒後教育充実に貢献できると期待しています。初期研修医のみならず、専攻医（後期研修医）、学生や卒業生の先生方も使用できる制度として、充実してまいりますので多くの方に使用頂きたく存じます。



アキュタッチ上下部消化管・気管支鏡システム

今年度、本学附属病院の初期研修医を中心に卒後のシミュレータ教育の充実のために、多数の高度シミュレータを導入します。大学病院で最先端の技術を用いてシミュレータ教育ができることは、奈良県の医療を発展させ、患者の方だけでなく地域の方々の安心につながるることになります。今後学外の医療従事者の方へも使用していただけるよう、購入予定機器の使用法、管理の仕方や運営体制について話し合いを進めているところです。

看護学科 白衣授与式

令和3年6月10日に白衣授与式を行いました。飛躍基金からは、「看護学の基礎をしっかりと学び、未来に羽ばたいてほしい」という願いを込めて、看護学科新入学生85名に実習用白衣、ズボン、エプロン、シューズを授与しています。

白衣授与式では、始めに石澤看護学科長が、これらは基金からの授与であるということを伝えられました。その後、新型コロナウイルスの影響の中での医療従事者としてのあり方、看護学を学ぶにあたっての心構えなどのお話をされました。

未来への飛躍基金では、これからも教育・研究活動等への支援を積極的に行ってまいります。皆様からのご厚志は、人材育成を目的とした修学環境の向上や本学と地域社会とのつながりを強化するための取組に活用させていただきますので、引き続きご支援をお願いいたします。



看護学生の代表からのお礼の場面

ふるさと寄附の申込受付期限について

* 令和3年分の寄附控除として活用できる申込書受付期限が迫っています。

【振込書の場合】12月10日(金)午前中 本学必着
【クレジットカード等の場合】12月24日(金)まで

奈良県立医科大学 総務課基金推進係

TEL : 0744-23-9973 (直通) FAX : 0744-29-8987

E-mail : hiyakukikin@naramed-u.ac.jp

HP : <https://www.naramed-u.ac.jp/~hiyakukikin/>



MBT研究所だより (第22報)

1. MBT 難病克服キャンペーン

MBT 難病克服キャンペーンは、①協賛企業 (協賛商品) の募集、②「難病克服支援 WEB セミナー」、③「難病克服支援 MBT 映画祭」の3本柱で取り組みを進めています。

(1) 協賛企業

本学とMBTコンソーシアムは、協賛企業の協賛商品の売り上げの一部を活動資金に、難病支援に向けた活動を連携して展開しております。9月10日現在12企業に協賛を頂き、協賛商品の販売・広報支援がなされております。

(2) 難病克服支援WEBセミナー

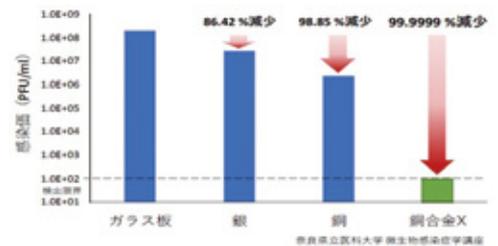
9月4日(土)、「第1回難病克服支援WEBセミナー」がWEBで開催されました。休日の午後にもかかわらず、医療関係者・患者会関係者・MBTコンソーシアム会員・一般市民が約320名、奈良医大の医学・看護学生が約70名、スタッフを含め約400名の参加がありました。セミナーの様子はYouTubeで配信しております。

(3) 難病克服支援MBT映画祭

8月19日、新聞、WEB、映像専門メディア等で全国に向け「難病克服支援MBT映画祭2021」の開催案内と募集要項を公開しました。「みんなで守るいのち」をテーマに、いのちを守る取り組みや難病に関わる人々を応援し、勇気づけるような1分～30分の短編映画を募集しております。2022年1月8日に、奈良県橿原文化会館で上映会・授賞式を開催し、応募作から、最優秀作品(副賞20万円)、優秀作品(10万円)、特別賞(5万円)を審査し表彰を行います。

2. 新開発銅合金蒸着マスクの開発

7月6日、奈良医大(微生物感染症学講座:矢野寿一教授、中野竜一准教授)と、やまと真空工業㈱は、新型コロナウイルスを、30秒で約1/1,000、1分で約1/10,000と迅速に不活化する新開発の銅合金を蒸着したマスクを開発したと報道発表しました。この銅合金(特許出願中)は、従来、ウイルス不活化コーティングの素材として用いられてきた銀や銅に比べて圧倒的な速さでコロナウイルスを不活化する素材です。本製品は、奈良医大のコロナ不活化に有効な銅合金の考案、やまと真空工業㈱の蒸着技術で実現したものです。



金属板に10分接触後のSARS-CoV-2感染量

3. MBT 微生物学研究所株式会社設立

7月1日、微生物感染症学講座矢野寿一教授を代表取締役とする「MBT 微生物学研究所株式会社」が創立され、奈良医大発ベンチャーの認定を受けました。奈良医大発ベンチャーは、MBT研究所の梅田智広研究教授が2018年10月に起業した「MBTリンク株式会社」が第1号ですが、それに続く第2号の起業となります。また、MBTコンソーシアムは、奈良医大と連携し医学知識を基に産業創生活動も推進する立場から、30万円の出資を行いました。「MBT 微生物学研究所株式会社」は「微生物・感染症に関するコンサルティング」及び「企業等から依頼された製品や化合物の病原性ウイルスや薬剤耐性菌に対する不活化効果の評価や検討」を主な業務内容としております。



認定書を持つ矢野代表取締役社長

4. MBT コンソーシアム 200 会員を突破

MBTコンソーシアムは、2016年4月に57会員で発足、2017年～2019年は微増、2020年にはコロナ禍対策等の取り組みで一気に会員数を増やし、2021年6月には200を突破しました。2021年9月10日現在で211会員が参加しております。また会員企業の本社分布も東京68社、大阪63社をはじめ、21都府県に拡大し全国的な活動になってきております。



大井川さん

5. MBT 学初の学位取得

6月25日、大井川仁美さんにMBT学で初となる博士(医学)の学位が授与されました。学位論文のテーマは「加速度と接触力センサーを用いた手指運動の可視化と評価:POC試験」であり、第12回ITヘルスケア学会学術大会では研究奨励賞も受賞しております。

先端医学研究支援機構だより

研究力向上支援センターからのお知らせ

1 第1回科研費獲得セミナーを開催しました

基盤研究 (A)・(B) 等に応募予定の研究者の方向けに、令和4年度科学研究費助成事業に係る獲得セミナー及び応募申請説明会を7月26日に開催しました。

未来基礎医学 准教授 森英一朗先生に、「試行錯誤の予算申請：基盤B採択に至るまでの3年間の紆余曲折」、精神医学 准教授 牧之段学先生に、「逆算思考による科研費申請」と題して講演をいただきました。お2人の先生からはご自身の経験に基づき、申請書作成のテクニック、審査員の評価基準等について、具体的な事例を示しながらお話をいただきました。

当日は、会場やオンライン参加を含めて多数の参加がありました。このセミナーの様子は、研究推進課の学内専用ホームページで視聴が可能ですので、当日参加されていない方は是非ご覧ください。



森准教授



牧之段准教授

2 第2回科研費獲得セミナーを開催しました

基盤研究 (C)・若手研究等に応募予定の研究者の方向けに、令和4年度科学研究費助成事業に係る獲得セミナー及び応募申請説明会を8月5日に開催しました。

総合医療学 講師 大野史郎先生に、「～スタートラインに立ちましよう～ 最低限の準備を」、糖尿病・内分泌内科学 講師 岡田 定規先生に、「みんなで目指そう、科研費獲得」と題して講演をいただきました。お2人の先生からはご自身の経験に基づき、研究の進捗状況のアピールの仕方、応募区分の選択の仕方等について、具体的な事例を示しながらお話をいただきました。

第1回のセミナー同様、研究推進課の学内専用ホームページで視聴が可能ですので、是非ご覧ください。



大野講師



岡田講師

3 若きトップサイエンティストの挑戦 (リサーチストーリー) vol4 を掲載しています

(本学ホームページ) > 研究力向上支援センター > 若きトップサイエンティスト > vol4 西和田敏先生 (消化器・総合外科学 助教)

消化器・総合外科学 助教 西和田 敏先生

このシリーズは、本学で国際的に活躍されている若手の研究者の方々にお話を伺い学内を始め広く学外にも紹介しています。

今回のリサーチストーリーでは、外科学分野のトップジャーナルである【Annals of Surgery】(IF=12.969)に論文が掲載された西和田先生にインタビューをしました。論文の概要や、本研究を進めてこられた動機、プロセスについてお伺いすると同時に、研究者としてスタートされた経緯などを伺っております。

この内容は、研究力向上支援センターのHPに掲載しておりますので是非ご覧ください。



研究力向上支援センターでは、この他様々な情報を発信しております。今後もメルマガ「科研費ニュース～Go for it! KAKEN～」や研究力向上支援センターの学内ホームページでご紹介をしますのでご期待ください。

国際交流センターだより vol.5

7月20日、「海外リサーチ・クラークシップ研究成果報告会」を開催しました。2018年度に海外の研究施設に研究留学した医学科5年生15名が、帰国後も継続してきた研究成果を報告し、学業と研究活動を両立する日々で逞しく成長した姿を披露しました。報告会終了後には表彰式が行われ、嶋医学部長より最優秀賞と優秀賞が授与されました。



参加の学生たち

MESSAGE

国際交流センターセンター長
嶋 緑倫 (医学部長)

この度の海外リサーチ・クラークシップ研究成果報告会では15名の学生の皆さんに研究成果を発表していただきました。5分間のプレゼンとは思えないくらいに密度が高く、学生のレベルをはるかに超えた研究者レベルの内容でした。発表後の質疑応答もとても活発で感心しました。この経験を生かして、医師になってからも研究を続けて国内のみならず国際的にも活躍してほしいと思います。最後に、これまでご指導いただいた所属研究室の先生方に厚く感謝申し上げます。

教養教育部長
酒井 宏水 (化学教授)

海外の研究機関から凱旋帰国されたあと継続して学内で研究した成果を拝聴し、審査をさせていただきました。皆さんが堂々と発表し、質疑応答している姿に、自身が留学先から帰国した当時のことを重ねていました。学会発表、論文発表にまで到達した完成度の高い研究成果も多々あり、皆さんの努力の賜物であることは勿論、ご指導くださった先生方の貢献も相当なものであったろうと拝察します。今後もぜひ研究マインドを持続し研究を発展していただきたいと思っています。

基礎教育部長
堀江 恭二 (第二生理学教授)

2年前の帰国報告会では、海外研修で刺激を受けた様子が前面に出ていましたが、それに対して今回の成果報告会では、2年前の経験を実際の研究成果として結実させた様子が見て取られ、実に頼もしく感じました。医学生としての学業に加え、時間を捻出しながら研究を進めるのは容易ではなかったと思いますが、きっと皆さんの将来に繋がるものと確信しています。最後になりますが、学生をご指導・ご支援いただいた教員の皆様、事務方の皆様へも厚く感謝申し上げます。

国際交流センター副センター長
森 英一郎 (未来基礎医学准教授)

海外リサクラ3期生にあたる現5年生は、2年次の冬に、それぞれが希望した海外研究施設でのリサクラ研修に参加しました。今回の研究成果報告会では、その後の2年間に学内の研究室に所属して研究活動を継続した成果について、御発表頂きました。2年生の春頃から始めた事前準備期間から数えると3年以上の期間、研究室に所属し研究活動に従事したことになります。学部学生の学業と両立しながら取り組んだこの経験は、本プログラムに参加した方々の今後に大きく影響を与えることが期待されます。

発表学生一覧 (氏名・所属研究室・発表演題・留学先)

■ 野津仁志 (第一解剖学)	[Neuronal responses to stress during development stage in BTBR mouse model of autism spectrum disorder 発達期における自閉スペクトラム症モデルマウスのストレスに対する神経応答] (🇲🇾 Monash University Malaysia / マレーシア)
■ 森川成孝 (未来基礎医学)	[神経変性疾患における液-液相分離破綻メカニズムの解明] (🇨🇦 University of Alberta Hospital / カナダ)
■ 佐々木俊秀 (消化器・総合外科学)	[膵癌肺転移におけるT細胞抑制因子と局所免疫機構の解明] (🇹🇼 National Taiwan University / 台湾)
■ 小澤享平 (免疫学)	[B細胞におけるヒストンメチル化酵素SETDB2の発現機構と機能解明] (🇲🇦 Sidra Medicine / カタール)
■ 小林かれん (薬理学)	[ミトコンドリア融合が自然免疫に及ぼす影響について] (🇺🇸 Medical College of Georgia, Augusta University / アメリカ)

最優秀賞 医学科 5年 中前 和 (生体分子不均衡制御学)

「ASCT2 と SMCT1 は腎臓における d-serine トランスポーターであった」

海外への派遣が決定して以来、本プログラムを通して、研究や英語、積極性やプレゼン力等、学べるものや得られるものが沢山ありました。帰国後の約3年間に亘る研究室活動では、学業やクラブ活動との両立が大変な時もありましたが、様々な実験手技や研究に必要な論理的思考を習得でき、また学会発表や論文執筆にも携わる貴重な経験をさせて頂き、入学した当初には想像もつかなかったような自分になったように思います。



最後になりましたが、本成果報告会において光栄な賞を頂きましたことが、懇切丁寧にご指導くださった先生方への恩返しになりましたら幸いです。
(CNRS Paris / フランス)

優秀賞 医学科 5年 下 結香 (生体分子不均衡制御学)

「オーファントランスポーターの抗体作製と検出」

留学中また渡米前後のトレーニングを通して、研究には、自分一人ではなし得ない大きなことに仲間と挑戦できる楽しさがあることを知りました。私自身が取り組んだ実験の成果はほんの僅かでしたが、チームの一員として研究を進めることができました。このような機会をくださった永森教授、ラボの皆様、また本プログラムに携わってくださった全ての方々に感謝申し上げます。多くの研究者の挑戦によって医療が発展していることに感謝し、今後も精一杯、尽力してまいります。



(Texas Tech University Health Sciences Center / アメリカ)

優秀賞 医学科 5年 西岡 樹 (免疫学)

「Immunological contribution in the development of lung cancer with pulmonary fibrosis」

この度、海外リサーチ・クラークシップ研究成果報告会にて優秀賞を授与していただき誠にありがとうございます。リサーチ・クラークシップの後、2年以上が経過し、現在は大学病院でベッドサイドラーニングを行っていますが、医学のあらゆる場面において基礎研究がいかに大切であるのかを日々痛感しています。ミシガン大学での経験を糧に、今後も基礎医学と臨床医学の橋渡しとなるような研究ができるよう引き続き精進していこうと思います。



(University of Michigan Medical School / アメリカ)

優秀賞 医学科 5年 藤原 邑 (循環器内科学)

「The treatment of *Lmna*-associated DCM with AAV improved the prognosis in our mouse model」

この度は、優秀賞を頂き、大変光栄に思います。振り返れば、この海外リサーチ・クラークシップで、Cincinnati Children's Hospital の坂部正英先生に御指導頂き、基礎研究の面白さに気づかせて頂いたことが、研究への姿勢を変える分岐点だったと思います。帰国後も、循環器内科学教室で心筋症の研究に携わり、4年生のコロナ禍の中、学会発表が出来ました。研究活動を通して得た考え方や積極的な姿勢を、今後のキャリアで活かしていきたいと思っております。御支援・御指導頂いた皆様に改めて、感謝申し上げます。



(Cincinnati Children's Hospital Medical Center / アメリカ)

発表学生一覧 (氏名・所属研究室・発表演題・留学先)

■ 北吉史佳 (未来基礎医学)	「ATR 阻害は 5-FU の感受性を増強する」 (University of Alberta / カナダ)
■ 船内文裕 (第二生理学)	「CRISPR/Cas9 システムを用いた GFP ノックインマウスの作製」 (Lincoln University / ニュージーランド)
■ 米田朋矢 (未来基礎医学)	「ヒト人工多能性幹細胞の骨分化実験における RT-qPCR 分析に用いるリファレンス遺伝子の検討」 (University of Texas Health San Antonio / アメリカ)
■ 鄭 美栄 (未来基礎医学)	「ヒト脳幹オルガノイドのプロトコル作成」 (University of Bologna / イタリア)
■ 山岡大真 (分子病理学)	「マイクロ流体トレーナーと Organ on a chip、その未来について」 (University of Bologna / イタリア)
■ 渡邊真子 (微生物感染症学)	「 <i>Citrobacter sedlakii</i> が産生する Sed-1 β -ラクタマーゼ産生機構の研究」 (Case Western Reserve University / アメリカ)

安全保障輸出管理への取り組み vol.4

安全保障輸出管理とは

安全保障輸出管理とは、日本を含む国際的な平和及び安全の維持を目的として、武器や軍事転用可能な貨物（装置・試料等）及び技術を大量破壊兵器の開発等を行っている国やテロリスト等の手に渡ることを防ぐための管理制度です。本学においても、研究が兵器等に転用されることのないよう、安全保障輸出管理への取り組みが始まっています。

大学における研究活動も規制の対象

■大学における貨物の輸出例

貨物輸出の機会	送付（輸出）の具体例
海外との共同研究等	<input type="checkbox"/> 実験用機器や部品等 <input type="checkbox"/> 研究試料 <input type="checkbox"/> 研究室で合成（自作）した薬品等
学術研究を目的とした研究試料等の送付・持出し	<input type="checkbox"/> サンプル品の送付・持出し <input type="checkbox"/> 自作の研究機材を携行

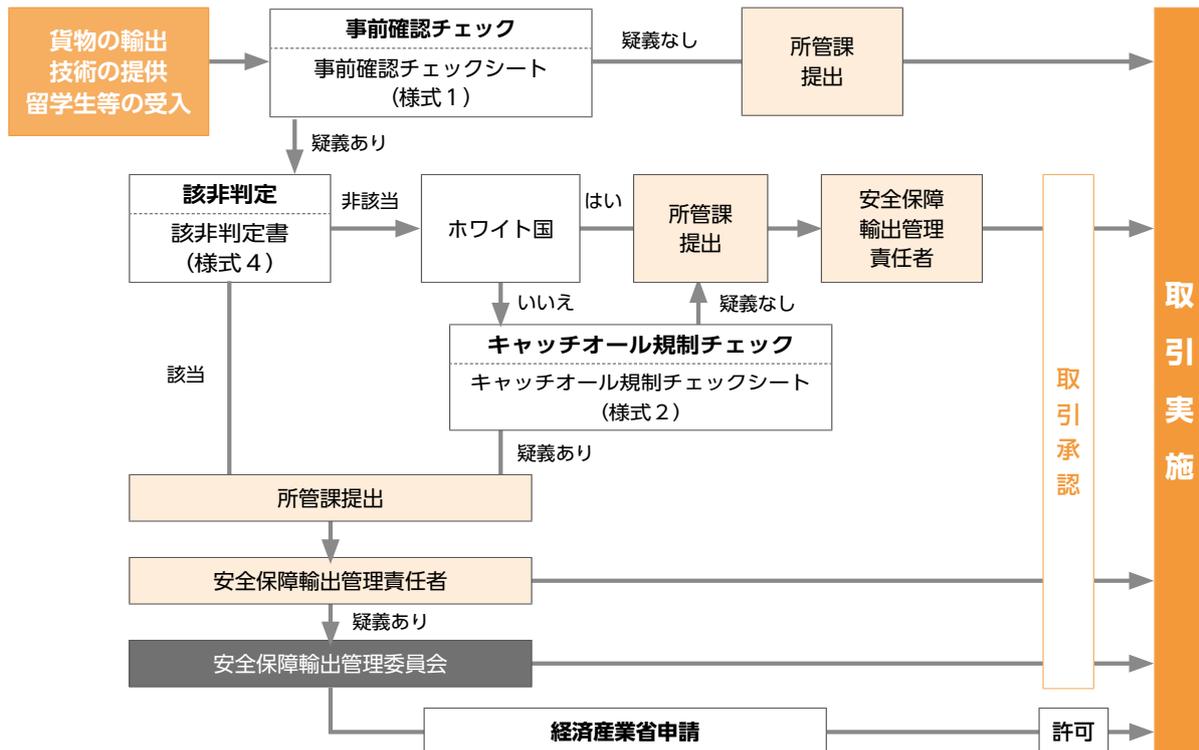
安全保障輸出管理では「貨物の輸出・技術の提供」が対象となり、大学における研究活動も規制の対象となる可能性があります。Zoom等オンラインでの外国人研究者との打合せも「大学における技術の提供の機会」となりますのでご注意ください。

■大学における技術の提供例

技術提供の機会	技術提供の具体例
学会等での研究発表、論文投稿	<input type="checkbox"/> 国内外の国際学会・シンポジウムでの研究発表・論文発表（オンライン開催も含む） <input type="checkbox"/> 海外の出版社への論文投稿 <input type="checkbox"/> 外国人研究者との打合せ（オンラインも含む）
留学生・外国人研究者の受け入れ	<input type="checkbox"/> 実験装置・分析装置・機器の使用 <input type="checkbox"/> 研究指導・技能指導（口頭も含む） <input type="checkbox"/> セミナー・打ち合わせ等での情報提供（オンライン協議も含む） <input type="checkbox"/> 電子メールや電話、オンライン協議、USBによる技術情報提供
外国からの施設見学等	<input type="checkbox"/> 研究室の設備（実験装置）の見学 <input type="checkbox"/> 技術資料の提供
外国の企業・大学との共同研究	<input type="checkbox"/> 電子メールや電話、オンライン協議、USBによる技術情報提供 <input type="checkbox"/> 公知でない技術情報の提供 <input type="checkbox"/> 外国人共同研究者の大学訪問の際に技術資料を提供

学内手続きの流れ

学内における安全保障輸出管理の手続きとして、取引を行う教職員等各自が事前確認チェックを行い、各様式を所管課に提出します。



【お問合せ】安全保障輸出管理事務局（国際交流センター）内線 2479 【規程・様式等】学内ホームページ>国際交流センター>安全保障輸出管理

看護部の紹介

ストーマ外来

創傷相談室 西林 直子

手術により造られた新しい排泄孔(人工肛門、人工膀胱)のことをストーマと呼びます。ストーマの合併症治療・予防、療養支援を行う場として15年以上前からストーマ外来が開設されています。在宅療養指導料やストーマ処置料など診療報酬を算定する当院で初めての看護外来であり、医師や多職種と連携しながら年間約600～700名の患者・家族から相談を受け、装具のフィッティング、スキンケアや生活指導を行っています。在院日数の短縮、高齢者世帯の増加により、訪問看護師から寄せられる相談もここ数年増えています。今後も状況が許す限り皮膚・排泄ケア認定看護師による同行訪問を行い、地域で暮らすストーマ保有者のケアにも積極的に取り組んでいきたいと思っております。



ストーマ外来の様子



状況に応じて使い分けるストーマ装具

授乳ケア外来

E棟5階 助産師 石田 圭子

当院産科はハイリスク疾患母児、精神的な問題を抱える母親、帝王切開分娩などの対象が多く、分娩後4～5日間という短い入院期間で母乳育児に必要な知識や技術を習得するには厳しい現実があります。また、入院中母児分離状態となり、育児経験がないまま退院した母親が、児退院後の育児に試行錯誤して戸惑うことも少なくありません。

多くの不安やストレスを抱えて悩む母親に寄り添い、心のしこりをほぐしていくのは助産師の大切な役割です。授乳ケア外来では、産科退院後から断乳の時期まで長きに渡り、継続した授乳ケアを行う場、心のよりどころとして、母児と助産師が向き合い、育児技術の指導に加え、エモーショナルサポートを行っています。

他にもアドバンス助産師が中心となり、乳腺炎患者に乳腺炎重症化予防ケア・指導に取り組んでいます。



助産外来

E棟5階 助産師 松村 広恵

メディカルバースセンターの外来部門である助産外来は、2010年の活動開始以降、妊娠期から産後1ヶ月まで正常経過の母児を対象とし、助産師だけで運営しています。妊娠期は妊婦健診を実施し、その結果をもとに個別性に合わせ、より正常に経過できるようにきめ細やかな保健指導をおこなっています。産後は退院後の母乳育児相談を中心に保健指導をおこなっています。産後1ヶ月は育児不安やストレスが強くなる時期であるため、心と体の不調を丁寧に聞き、その対処方法を一緒に考えます。家族だけでなく、地域や多職種と連携して母親をサポートしています。不安な時代だからこそ、医師とは違う助産師にしかできないケアを提供できるよう活動しています。



循環器内科外来

C棟7階 高宮 久美子

循環器内科外来では、慢性心不全をもつ患者や家族に対して食事や水分、運動、服薬管理、生活環境の調整を中心に療養相談、指導を行っております。指導内容に制限事項が多く、患者や家族がやる気を失わないように、本人や家族の思い、QOLを一番に考えながら関わることを大切にしています。心不全の再入院の理由は、自己管理不足が約半数を占めております。医師や理学療法士、管理栄養士、MSW、薬剤師と相談、多職種連携をしながら、療養生活環境を整えることで再入院予防の効果を上げています。



働き方改革だより

今回は看護職ワーキンググループの紹介です。病棟におけるタスクシフト、業務効率化や勤務時間短縮に向けた取り組みを行っています。

看護職における働き方改革

看護副部長 石飛 悦子

看護部では、全看護職員の中から働き方改革について関心のあるスタッフを募り、ワーキンググループに参加してもらっています。ワーキングでは、メンバーによる活発な意見交換により、働き方における課題をどのように解決していくのか、改善策を検討しています。今後想定される職種間でのタスクシフトへの対応を見据え、看護職の本来業務時間の確保について検討する中で、今年度はベッドメイキング業務の移管を目標とし、トライアルで2病棟に導入しています。今後も働き方改革により勤務環境を改善し、スタッフが「健康で働き続けられる職場づくり」をモットーに取り組んでまいります。

ベッドメイキング業務のタスクシフト

看護師長 大川 美加

他職種に移管可能な業務の中から「退院後のベッド清掃」「ベッドメイキング」を選定し、人事課障害者雇用推進係と連携し、「ベッドメイキングのチェックリスト」を作成しました。チェックリストをもとに、障害者雇用スタッフのみで業務できる環境を病棟師長と調整し、C棟7階病棟、A棟4階病棟の入退院が多い曜日から開始しました。タスクシフトにより看護師や看護補助者がケアに従事する時間を確保し、看護師の負担軽減や看護補助者のスキルアップを図っています。



POINT 2人ペアで
空きベッドを巡回

～トライアルを振り返って～

C棟7階病棟 浅川 師長

開始当初は部屋の場所やベッドの位置を把握するのが大変のようでしたが、わかりやすく表示し適宜付き添って説明することで最近ではスムーズに実施いただいています。タスクシフトしたことで看護補助者には患者の清拭など看護師と共にケアに参加してもらえるようになり助かっています。



障害者雇用推進スタッフ

- ・どこまでやれば「キレイにできた」完成形なのかイメージできず苦労した。
- ・二人で段取りよくできるように、まだ終わっていない場所があれば声をかけたり手伝ってもらったりスムーズにできるようにしていきたいです。

「健康で働き続けられる職場づくりを」

看護師長 中村 由美



看護部では従来から看護師の多くが本来の時間より早めに出勤する風土があり、数年前から状況の改善を呼びかけてきましたが、情報収集に対する不安や病棟内外の業務の時間制約などもあり、長年の職場風土を変えていくことは容易ではありませんでした。

ワーキンググループではこの課題に取り組んでおり、長時間労働に伴う健康問題や効果的な情報収集のあり方について検討した結果を発信することで、現場では少しずつ「働き方」への意識が高まっています。今後さらに各病棟での業務や時間配分の見直しを進め、業務効率化や時短に向けた課題にも取り組んでまいります。

TOPICS

「仕事も、休みも、計画的に」

年次有給休暇を5日以上取得できていない方は、年度末までに計画的な取得をお願いします。

放射線治療と遠隔医療 — テレワークの実施にむけて —

医療情報部 部長 玉本 哲郎

現在、放射線医学の領域での遠隔医療、すなわち、テレワークが保険診療で認められているのは、CTやMRIなどの読影業務をサポートする遠隔画像診断支援と放射線治療の専門医がいない治療施設で、緊急の放射線治療を支援するための遠隔放射線治療計画支援の2つである。その他として、保険診療とは別に行われているのは、Web会議システムあるいはTV会議システムなどを用いた遠隔カンファレンスである。

ところで、放射線治療のワークフローは一般的に以下の6つのステップで行われる。①医師が患者の診察後に臨床評価と治療方針の決定を行う。②治療を行う場合には、固定具を作成しCTシミュレーションを実施する。③医師あるいは医学物理士等が治療計画を行う。④決定された治療計画の品質管理・保証業務を医学物理士あるいは放射線技師が行う。⑤医師の確認のもと位置照合を行い、治療を実施する。⑥放射線治療中および後に医師は経過観察と臨床評価を行う。最近の放射線治療の高精度化に伴い、以前は医師が職人芸的に行ってきたリアルタイムな診療体制から、放射線治療の各ステップがコンピュータ上で実施されるシステムチックで、かつノンリアルタイムな対応が多い診療体制に変化した。そのため、患者さんの直接の診察を除いて、遠隔での診療支援がしやすい状況になっている。ただし、診療ガイドライン化されているのは、③のステップの治療計画の遠隔支援のみである。放射線治療のトータルな支援を考え

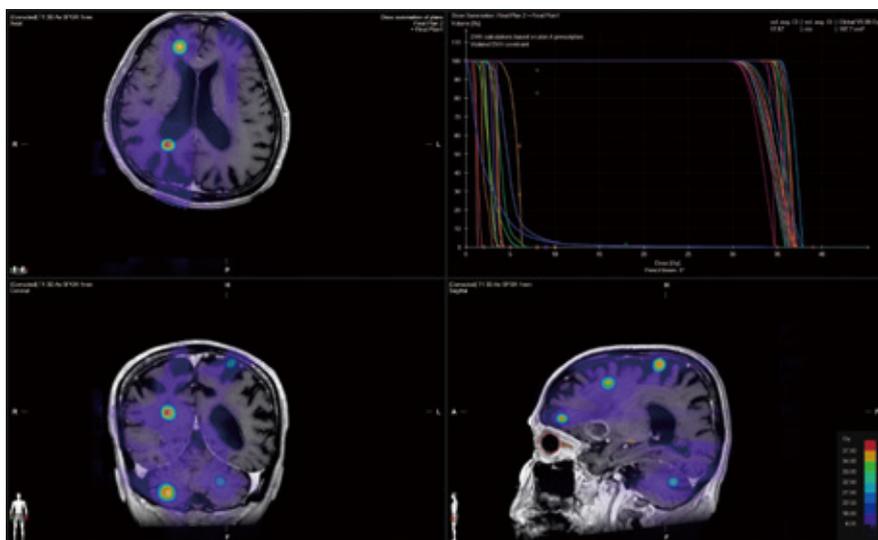
ると、本来は上記①から⑥のすべてのステップが必要である。

実際の遠隔治療計画支援としては、まず、地域医療を担う常勤の放射線治療医がいない施設や放射線治療専門医がいない施設の支援が挙げられる。その次に、常勤の放射線治療専門医がいるものの、一人医長である場合の通常の治療計画支援や強度変調放射線治療が実施可能な施設であっても担当医の専門領域以外の場合の治療計画支援などがある。さらに、常勤医の働き方改革のため対応として、大学病院などの基幹病院でのテレワークの推進のための自院での利用などが考えられる。私はこれまでに放射線治療の遠隔支援の開発研究(文部科学省・科研費)で、治療計画の実施以外にも、治療実施時のモニター画面をWeb会議システムの画面共有を利用し、画像誘導放射線治療の遠隔支援をリアルタイムで実施する方法も開発し、実際に関連病院での実際の運用も行っている。

最後に、遠隔での放射線治療支援の実現には、セキュアで安定した通信環境の整備は言うまでもない。また、利用する施設で遠隔での放射線治療の診療体制が必要であり、さらに遠隔支援にコストをかけてもよいと病院経営陣が判断することがポイントである。今後、放射線治療における遠隔医療は、支援側の医師等のスタッフの働き方を考慮しつつ、単に治療計画の支援のみではなく、放射線治療のトータルな支援が広がっていくことを期待する。



放射線治療装置 (リニアック)



転移性脳腫瘍 (多発) に対する放射線治療計画の例

6.25～6.27 **JUEMUN2021に参加！**

医学科4年 竹下 沙希

本年6月25日から3日間、本学の学生13人が臨床英語講座を通して本学を代表し、Japan University English Model United Nations (JUEMUN: 日本大学英語模擬国連)に参加しました。

模擬国連とは、参加者が世界各国の代表として国際問題の解決のために英語で議論を重ね、国連会議を模擬する活動です。会議を通して自分の担当国の利益を守りつつ、他国との関係性を考慮しながら問題解決のためのアクションプランを作成します。

今年度は本学3度目の参加で、“Appropriate and Resilient Development for Environmental Sustainability”というテーマで会議を行いました。本学からの参加者はイギリス(UK)、エチオピア、エルサルバドル、スイス、バヌアツ、モロッコを担当しました。この大会には、世界から13ヶ国の12大学から149名の学生が参加しました。また、本学は外国語で有名な総合大学や外国語大学に並び唯一の単科医科大学として参加させて頂きました。

<https://juemun.org/archives/juemun-2021/>

学生達は4月から担当国や所属地域の情報収集やスピーチ原稿の作成、会議ルールの勉強や交渉の練習など、6月の本番当日に向けた準備を進めました。メンバー全員で集まることが難しい状況の中、様々なオンラインアプリケーションを活用してメンバーが互いの進捗や収集した情報、トラブルや相談したい内容を随時共有することで非常に効率的に準備することができました。また、オンライン会議を活発に行い、対面でコミュニケーションが取りにくい中でも親睦を深めてチームワークを高められました。

模擬国連当日は、Zoomを用いて全国各地から参加した学生たちと担当国の状況や意見を共有するためのスピーチや活発な交渉が行われました。議論の内容が同じ問題でも国によって捉え方や困っている具体的な内容やその緊急度が異なることがあり、その中で双方が納得できるアクションプランを作る交渉が

大変白熱しました。白熱する中で、如何にリーダーシップを発揮して議論を進行し、他の参加者がアクションプランを作成する際は情報収集や文章作成を手助けするのか、刻々と変わる議論状況に適応する能力の重要性を痛感しました。自分の主張を的確に英語で伝える能力のみならず、他の参加者の主張や他国の状況を正確に把握する理解力や、議論を重ねて合意に到達する交渉力の重要性を実感する良い機会となりました。

今回は3日間の会議が全てオンラインで開催された初めての年であり、Zoom使用上のトラブルに見舞われるケースが散見されましたが、運営チームとの連携によって解決しながら無事に会議を終えることができました。

初年度は3人でスタートした模擬国連の活動でしたが、3年目で4倍以上のメンバーにまで増え、さらに厚みを増したチームとなりました。来年以降もJUEMUNをはじめとした模擬国連へ活発な参加を続け、日本一の英語教育を目指す医科大学として、更に活動の幅を広げていきます。

*** JUEMUN2021 参加メンバー**

植田 まさみ	6年
榊 華野子	6年
中前 和	5年
竹下 沙希	4年
堀江 風花	2年
岡田 七海	2年
井口 一步	2年
久保田 一郎	1年
阪本 周翼	1年
玉本 咲楽	1年
中里 圭之介	1年
山田 将太	1年
讓尾 進之介	1年

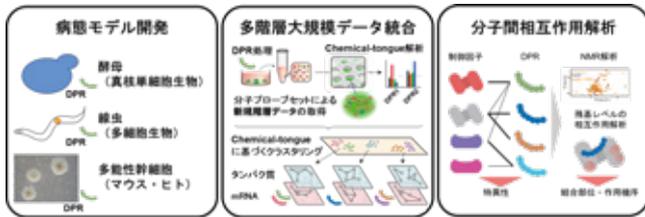


オンラインでの議論

7.1 AMED 課題がスタートしました

未来基礎医学 准教授 森 英一郎

日本医療研究開発機構 (AMED)・脳とこころの研究推進プログラムの精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクトにおいて、「相分離破綻に起因する神経変性疾患に関する研究開発」課題 (代表: 森) が開始となりました。富田峻介先生 (産業技術総合研究所) と丹羽達也先生 (東京工業大学) と齋尾智英先生 (徳島大学) の分担者 3 名と吉澤拓也先生 (立命館大学) と新海陽一先生 (産業技術総合研究所) の協力者 2 名と共に、「1) 病態モデル開発、2) 多階層大規模データ統合、3) 分子間相互作用解析」を通じた、神経変性疾患の病態解明に挑みます。



7.27 MBT 難病克服キャンペーンの活動について討議しました

MBT では「難病」に苦しむ人々をサポートするための「MBT 難病克服キャンペーン」を実施しています。難病とは発病の機構が明らかでなく、治療方法が確立していない希少な疾病です。キャンペーンの一環で、活動の趣旨に賛同いただける企業を現在募集しています。

今回の MBT 運営会議では、主に賛同頂ける協賛商品の報告をいたしました。また、難病克服に関する WEB セミナーの準備状況についても確認を行いました。

上記キャンペーンに加えて、MBT コロナ克服キャンペーンも引き続き活動しています。

MBT は幅広く社会貢献を行っていきたく考えています。



MBT 難病克服キャンペーンについて討議

8.5 国内外初の十二指腸癌診療ガイドラインが発刊されました

消化器・総合外科学 教授 庄 雅之

この度、国内外初の十二指腸癌診療ガイドラインが発刊されました。希少癌の一つである十二指腸癌は近年増加傾向にあります。標準治療といえるものが確立しておらず、日常臨床においては治療選択に苦慮することが少なくありません。今回、消化管外科、肝胆膵外科、消化器内科、腫瘍内科、放射線科等の多分野にわたる全国のエキスパートによる十二指腸癌診療ガイドライン作成委員会が、日本胃癌学会、日本肝胆膵外科学会の支援の下、組織され、私が委員長を拝命し、本学消化器・総合外科学教室が事務局を務めました。委員の皆様のご尽力、教室スタッフの多大なる協力で、無事に上梓できました。本学図書館の鈴木副主幹、大瀬戸主査にも温かくご支援、ご協力を賜りました。併せて心から深謝申し上げます。今後はガイドラインの英語化、第二版に向けての改訂作業等を遅滞なく行なっていく予定です。これからも希少疾患の治療やガイドライン作成活動を通じて、本学のさらなる発展に貢献できればと願っています。



8.5 令和3年度第1回キャンパスミーティングを開催しました

キャンパスミーティングは、学生の代表者と教職員が授業や学生生活などについて意見交換を行う場として毎年開催されています。

今年度は、開催時期や内容等について、学生からの意見・要望をより多く取り入れ、「授業について」、「アメニティについて」、「部活について」等のテーマに沿って活発な意見交換が行われました。学生の率直な意見や提案は教育環境等を整備していく上で参考になるものが多く、約 2 時間のミーティングは大変有意義な時間となりました。



キャンパスミーティングの様子

8.16～8.19 コンソーシアム実習(奈良医大・早大連携講座)を開催しました

本実習は早稲田大学との連携協定の締結を契機に平成22年度から開始し、今回で11回目の開催となります。今年度は8月16日から19日の4日間で開催しましたが、新型コロナウイルス感染症を考慮し、Zoomを用いた遠隔授業で実施しました。

本学からは、疫学・予防医学講座の佐伯教授に「疫学の基礎と健康をまもる住環境研究の応用」、地域医療学講座の周藤准教授に「奈良県の地域医療」をテーマとしてご講義いただき、住環境から見た健康問題や、奈良県を取り巻く医療など、身近にある医療について学習しました。

早稲田大学からは、長谷川教授に「医療経済」、野口教授に「医療経営」、岩崎教授に「高齢社会とICT」をテーマにご講義いただき、経済学から見た医療や、医療と高齢社会の結び付きなどの、現代医療が抱える問題などについて学習し、普段の授業とは違ったアプローチで医療について考える機会となりました。

また、最終日には南奈良総合医療センターから明石陽介先生に地域医療に関する現状や課題等のご講義いただき、その課題を元に、両校学生でのグループワークを実施しました。グループワークでは、明石先生とともに早稲田大学大島教授と本学教育開発センター若月教育教授を交え、医療を目指す学生だけではなく、様々な目線からの盛んな意見交換がなされ、グループごとに発表を行いました。参加した学生にとっても地域医療の問題や魅力について考えるきっかけとなる、有意義な授業となりました。

8.18 看護学科オープンキャンパス2021をWeb開催しました

看護学科のオープンキャンパスは、今年度も昨年に引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、ホームページにおける動画配信で開催しました。

嶋副学長から開催のご挨拶をいただき、石澤看護学科長からは「看護系大学を受験しようと思う人へ」というテーマで、「看護と看護学」及び「本学の取り組み」についてお話いただきました。

また川上看護教育部長からは、学科紹介と入試概要について、本学の特徴や強みをわかりやすくご説明いただきました。

そして今年の模擬ミニ講義では、精神看護学の風間教授に「看護師のコミュニケーションの特徴」をテーマに、患者さんとのコミュニケーションで大切なことや、精神科の看護師と他科の看護師が用いるコミュニケーションの違いなどについて講義していただきました。

動画は、本学ホームページで視聴可能です。ぜひご覧ください。



風間教授による模擬ミニ講義

8.18 難病克服支援MBT映画祭について議論しました

8月のMBT運営会議では7月に引き続き、主に「MBT 難病克服キャンペーン」の活動内容について議論しました。キャンペーンの新たな活動として、「難病克服支援MBT映画祭」を開催します。難病克服に立ち向かう人々の応援にふさわしい映像コンテンツの公募を行い、優秀作品等を広く公開し、人々の難病に対する理解を深めたいと考えています。

会議の中では、「MBT 難病克服キャンペーン」を盛り上げていくため、作品公募に関する周知方法の情報共有、映画祭開催に向けての課題を洗い出しました。その他、ベンチャー企業支援状況の報告、2025万博協会との連携に向けての議論も行いました。

MBT運営会議は毎月1回開催しており、MBTの研究や取り組みの総合調整を行っています。主たる大学となるべく今後もMBTの活動を続けていきたいと思えます。



難病克服支援MBT映画祭について討議

8.27 令和3年度自衛消防訓練を実施しました

8月27日に自衛消防訓練を実施しました。前半は、講義形式で本学の防災組織や教職員の動員基準、災害発生時の初動活動について確認しました。後半は、実災害現場を想定した無線通信訓練を取り入れて、避難誘導、負傷者搬送、初期消火の各訓練を行いました。

自衛消防・防災隊は地区別(大学地区、病院地区)、班別(消火班、避難誘導班、救出班、応急救護班等)に組織編成されています。しかし、例えば負傷者の発生がなければ、応急救護班は別の班の支援に回る等、班域を超えて活動する場面も想定されます。避難誘導訓練では、無線呼び出しを通して他班支援の指示を伝達し、想定外の活動にも臨機応変に対応するためのシミュレーションを行いました。

災害は初動の活動次第で被害を軽減できることが多くあります。そのためにも、隊員には活動全体の知識や意識を醸成することが重要です。今後も継続して訓練を実施する予定です。



負傷者搬送訓練

8.30

厚生労働省令和3年度女性医療職等の働き方支援事業に選定されました

女性研究者・医師支援センター マネージャー 須崎 康恵

このたび、厚生労働省が公募する「女性医療職等の働き方支援事業」の令和3年度実施者に、本学が選定されました。「女性医療職等の働き方支援事業」は、女性医療職等がキャリアと家庭を両立出来るような取り組みを構築する機関を厚生労働省が選定し、経費等を支援することで当該医療機関における女性医療職等の働き方支援の充実を図り、その後、全国へ女性医療職等の支援を普及させることを目的としています。

今回採択された本学の事業では、女性研究者・医師支援センター（センター長：嶋緑倫医学部長）が主体となり、働き方改革推進委員会（委員長：宇都宮弘和理事）および附属病院内の働き方改革プロジェクト（責任者：吉川公彦附属病院長）と協同して、①ライフイベント（不妊治療、妊娠・出産、育児、介護）中の女性医員への研究支援員の配置、②女性医師のキャリア向上に影響を及ぼす職場環境の調査を実施します。支援対象となる女性医員の方々や調査を依頼する臨床系教室には、女性研究者・医師支援センターから改めてご連絡致します。どうぞご協力のほどよろしくお願い申し上げます。尚、詳細につきましては、女性研究者・医師支援センター（内線 2525）までお問い合わせください。

9.1

学長室にロボット「temi」(テミ)を設置しました

MBT 研究所 梅田副所長は、サービスの社会実装を目指し、これまで取り組んできた成果や今まで行ってきた 20 箇所を超える実証試験の結果より、サービスを深掘し、自治体や個人のニーズに合わせた機能、サービスを企業連携により研究開発を行っています。

ロボット「temi」の社会実装での展開もその1つです。

このロボット「temi」は、高さ（身長）100cm、1回の充電で約8時間稼働、充電ステーションには自動的にドッキングして無線給電を行うものです。例えば遠隔地からでも操作が可能で、「temi」の所有ユーザーに生体計測を打診したり、ヘルスケア相談に応じたりすることもできます。人がロボットに近づきサービスを利用するのではなく、ロボットが人に近づく、移動困難な方の利用を見据えた新たなサービス展開を想定しています。

MBT では、顧客価値向上を目指し、新たな生活様式を見据えた様々なサービスを積極的に検討、社会実装を進めていきたいです。



パーソナルロボット「temi」

9.4

第一回 MBT 難病克服支援 WEB セミナー開催しました

現在 MBT では「MBT 難病克服キャンペーン」を実施しており、その一環として9月4日に「第一回 MBT 難病克服支援 WEB セミナー」を開催しました。

本セミナーは、難病に関わる人々の現状や研究動向などを多くの方々に啓発する事を狙いとしたものです。当日は YouTube を使った Live 配信を行い、杉江脳神経内科教授の司会のもと細

井理事長・学長の開会の辞に続いて、難病克服に医療の面から尽力されている井上治久京都大学 IPS 細胞研究所教授と、ご自身も遠位型ミオパチーという難病を患いながら患者会の代表として様々な活動を展開されている織田友理子氏にご講演をいただきました。医療関係者、患者、一般の方々など多くの方が視聴され、難病に対して理解を深める一助となりました。



YouTube への Live 配信の様子



Web 講演の様子

9.6 相分離制御破綻の機序解明

未来基礎医学 准教授 森 英一朗
 脳神経内科学 教授 杉江 和馬
 助教 七浦 仁紀

この度、立命館大学の吉澤拓也講師、徳島大学の齋尾智英教授、名古屋大学の愛場雄一郎准教授らとの共同研究を通じて、C9orf72 遺伝子の非翻訳領域リピート異常伸長が原因の筋萎縮性側索硬化症(ALS) や前頭側頭型認知症(FTD) において産生される毒性ペプチドが、相分離制御因子の機能を阻害する分子メカニズムを明らかにしました。このことは、ALS や FTD をはじめとする神経変性疾患の病態解明、治療法開発につながることで期待されます。本成果は、国際科学誌「Nature Communications」に掲載されました。



オンライン記者会見

9.9 第5回 LLPS 研究会を開催しました

未来基礎医学 准教授 森 英一朗

9月9日に、第5回 LLPS 研究会(世話人代表:森英一朗)を開催しました。LLPS 研究会は、昨今研究発表が急速に増加している分野である LLPS (液-液相分離) をテーマとしております。この度の第5回開催は、コロナ禍ということ踏まえ、完全オンライン (Zoom Webinar) での開催 [主催:日本医療研究開発機構 (AMED) 森課題・吉澤課題・齋尾課題、第5回 LLPS 研究会実行委員会、共催: ASUKA 医学研究会] となり、250名を超える視聴者に御参加頂き、活発な議論が行われました。



9.10 「第1回 英語で学ぶ医学・看護学 Web セミナー」を開催しました

昨今、国際学会や留学においてはもちろんのこと、国際化に伴い国内学会や日常診療においても、医学英語の必要性が大きくなっています。そこで本学では、学部教育時から「英語で医学や看護学を学ぶ」機会の拡充を図るため、本年6月に教授会の検討委員会として「英語で学ぶ医学・看護学アドホック委員会」を設置し、アドホック委員会の取り組みの一貫として、9月10日に第1回 英語で学ぶ医学・看護学 Web セミナーを開催しました。

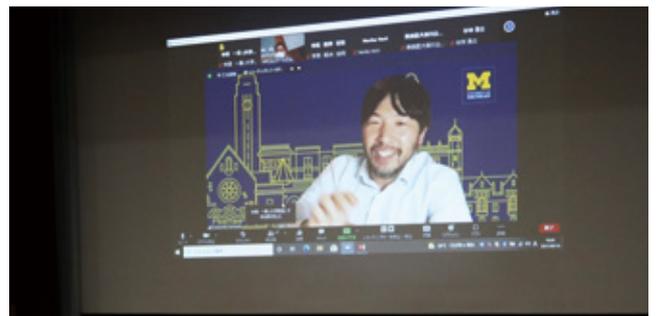
当日は、「Who is the troublemaker? - Identifying disease-associated pathobionts in inflammatory bowel disease」と題して、国際交流協定大学であるミシガン大学の准教授であり、本学の招聘教授である鎌田信彦先生に講義いただきました。セミナーは、大講堂並びにWEB配信でのハイブリッド方式で開催し、教職員及び学生 180名以上が参加しました。

今後も定期的に本セミナーを開催し、本学の英語教育の活性化に繋がっていきたいと考えています。



細井学長による開会

伊藤教授による主旨説明



ミシガン大学とオンラインで結び講演を実施



学生の質問に答える鎌田先生

9.9

福島県桑折町で MBT 講演・意見交換会をしました

福島県桑折町にて福島介護事業戦略振興構想が進んでいます。現地メンバーから MBT 研究所 梅田副所長に講演および打ち合わせの依頼があり、その構想に賛同した自治体・企業・地元 NPO や商工会メンバーが集まり、講演会・意見交換会が行われました。

震災原発被災の福島県は震災前人口が 210 万人、震災後 7 年経過の現在で 190 万人、今後も年 2 万人の人口減が継続すると予想されており、40 年後には人口が半減します。

この人口減・少子高齢化に直面し地域衰退を余儀なくされる地域での危機意識から、今後過疎地域ならではの個々の健康管理、介護支援の事業展開を行いたいとの想いで、福島介護事業戦略振興構想が発足しました。

MBT 研究所では、各地での MBT 実証経験を踏まえた研究成果で、福島に合った未来を検討していきます。



福島県桑折町との意見交換会

9.16

第 74 回解剖慰霊祭が執り行われました

9 月 16 日午後 3 時から大講堂において、第 74 回解剖慰霊祭が執り行われました。

昨年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響から開催を見送りましたが、今年度は参加者を白菊会役員と学内関係者に限定して開催しました。また、参列できなかった方のために、インターネットによる中継を行いました。

今年は新たに、系統解剖 75 柱、病理解剖 53 柱の計 128 柱の御霊を加えて、6,757 柱の御霊をお祀りさせていただきました。

黙祷の後、学長の祭文奉読、医学科 2 年生総代の岡田七海さんの感謝文奉読、参列者の献花と続き、最後に学長からのお礼の挨拶により終了しました。

医学の発展と医学教育のために、自らの御体を捧げてくださった方々の崇高なご遺志に改めて深い感謝の意を表しますとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。



細井学長による祭文奉読

9.16

第 20 回近畿・中部地区大学等知的財産連絡会議に参加しました

近畿・中部地区の大学による産学官連携活動についての意見交換会に参加いたしました。

知的財産連絡会議は、日々の産学連携活動での疑問や課題を共有し、意見交換を通してお互いの産学官連携活動の質を高めていくことを目的に発足したものです。近畿・中部地区の 19 大学の職員・産学コーディネーターとオブザーバーとして近畿・中部経済産業局や特許庁で構成されており、年に 1 度集まり論議を行っています。

今年度は、新型コロナウイルス感染対策のため、オンライン形式での開催となりました。

前半では「生物多様性条約対応と安全保障貿易管理における知的財産の課題」をテーマとした滋賀医科大学の小笠原敦特任教授による講演が行われました。滋賀医科大学での具体的事例をベースに、実験動物の国内育成の必要性や今後日本がとれるバイオ戦略の可能性など将来を見据えた広い視点からの問題提起がなされました。

後半ではグループに分かれ、各機関が抱える産学連携活動における課題や業務にあたる中で生じた疑問点について意見交換を行いました。知的財産の活用方法など各大学で共通する課題もあり、活発な議論が展開されました。

今回学んだ他機関の制度・取り組みの良い点を取り入れ、より質の高い研究支援体制を目指してまいります。



Web による意見交換

9.17

実験動物慰霊祭を執り行いました

実験動物の尊い生命に対し哀悼の意を表すため、実験動物慰霊祭を執り行いました。今年度も、新型コロナウイルス感染症の拡散防止対策として参列者の安全面を第一に考慮し、関係者のみで執り行いました。

また、参列できなかった方のために、慰霊祭の様子を Zoom 配信しました。

私たち医学に携わる者は、人間はもちろん動物の生命も尊重しなければなりません。代替的手段がなく、やむをえず動物実験を行うときは、動物愛護の観点から、動物への苦痛を軽減し、さらに犠牲になる動物数の削減に努めることが必要です。そして、動物の生命から得られた貴重な情報を研究成果として広く社会に還元していくことが私たちの責務です。



細井学長による献花

9.30 シーズ集を発行しました

今年度は85名の先生方より、研究シーズを100件応募いただき、研究シーズ集を発行しました。

大学の研究成果を社会に広く還元していくためには、企業等との連携が不可欠です。まずは、大学が何を研究しているのか知ってもらい、本学と企業等を結び架け橋の役割を、シーズ集が果たしてくれると期待しています。

シーズ集は、本学に在職する研究者とその研究活動に関する情報を広く社会に紹介し、本学の知的財産を産学官連携活動に有効に活用していくことを目指し毎年作成しています。

シーズは、本学のHPで公開する他、冊子版を公的機関や企業の研究開発部門等にも配布しております。なお、新しいシーズがありましたら、まずは研究推進課までお問合せください。また本学では、産学官コーディネーターを配置しております。随時相談を受け付けておりますので、お気軽に産学官連携推進センターまでご連絡ください。



No.	テーマ名	職	研究者名	講座・研究領域名
1	要素が自発的に揺らぐシステムの情報処理原理の解明	講師	高木 拓明	物理学
2	人工赤血球 (O ₂ /CO 運搬体) 製剤	教授	酒井 宏水	化学
3	KIR 遺伝子多型と移植免疫および疾患感受性との関連	博士研究員	石谷 昭子	未来基礎医学
4	非古典的 HLA 分子の、iPS 由来の細胞、オルガノイド等の移植免疫抑制への応用	博士研究員	石谷 昭子	
5	KIR 遺伝子 allele 多型と関節リウマチとの関連	博士研究員	石谷 昭子	解剖学第一
6	幼少期の養育環境が脳の発育に及ぼす影響	教授	西 真弓	
7	疾患モデルマウスの集団飼育下長期行動解析	教授 研究助教	西 真弓 遠藤 のぞみ	
8	新規疼痛関連遺伝子の同定とその機能解析	准教授	牧之段 学	精神医学
9	視線保持に関与する神経機構の解明	講師	田中 達英	解剖学第二
10	視線保持に関する神経機構の解明	教授	齋藤 康彦	生理学第一
11	ホモ変異体 ES 細胞バンクを用いた分化制御因子の探索	教授	堀江 恭二	生理学第二
12	新しいがんの予後マーカーの開発と応用	教授	高沢 伸	生化学
13	脂肪酸による癌転移の予防	教授	國安 弘基	分子病理学
14	がん転移促進因子 HMGB1 の吸着除去	教授	國安 弘基	
15	抗クロウディン 4 抗体による癌化学療法増強	教授	國安 弘基	
16	抗クロウディン抗体による癌抗体療法増強	教授	國安 弘基	
17	抗腫瘍性脂肪酸によるサルコペニアの予防	教授	國安 弘基	病原体・感染防御医学
18	皮膚・毛包再生に関わるシグナル伝達の解析と応用研究	准教授	王寺 幸輝	
19	メタロ - β - ラクタマーゼ新規検出法の開発	教授	矢野 寿一	微生物感染症学
20	薬剤耐性菌の迅速検出法の開発	准教授	中野 竜一	
21	血清中の HLA-G 抗原スクリーニング	助教	王寺 典子	免疫学
22	メタボリックシンドロームを標的にした抗酸化食品成分の開発	教授	吉栖 正典	薬理学
23	ミトコンドリア DNA のバイオマーカーとしての役割	准教授	中平 毅一	
24	室内温熱環境が血圧・睡眠に及ぼす影響に関する疫学研究	教授	佐伯 圭吾	疫学・予防医学
25	光曝露の健康影響	特任准教授	大林 賢史	
26	食品の安全に関するリスクコミュニケーション手法の開発	教授	今村 知明	公衆衛生学
27	多職種連携における医療コミュニケーション	講師	岡本 左和子	
28	医療・介護・健診データベースを用いた臨床研究	助教	西岡 祐一	発生・再生医学
29	単一細胞トランスクリプトーム解析法	教授	栗本 一基	
30	血栓溶解酵素含有複合体	教授	斎藤 能彦	循環器内科学
31	心腎連関分子機序に立脚した新規心血管疾患治療薬の開発	講師	尾上 健児	
32	心腎連関分子機序に立脚した新規心血管疾患治療薬の開発	教授	斎藤 能彦	
33	肺炎予防を目指す呼吸一嚥下同調測定機器の開発	教授	室 繁郎	呼吸器内科学
34	鼻呼吸の重要性を解明する - 快適な呼吸・睡眠をめざして -	准教授	山内 基雄	
35	生体信号としての呼吸時系列波形解析と疾患多様性	准教授	山内 基雄	
36	香りを用いた呼吸動態の修飾が心身の健康にもたらす影響について	准教授	山内 基雄	
37	既存薬剤の Drug repositioning による肝病態進展制御	教授	吉治 仁志	消化器内科学
38	腸肝相関を標的とした肝疾患治療法の開発	教授	吉治 仁志	
39	エクオール測定による NASH の新検査法の確立	准教授	赤羽 たけみ	
40	肝星細胞を標的とした NASH 新規治療法の開発	講師	浪崎 正	
41	肝硬変のサルコペニア 新規薬物治療法の開発	講師	浪崎 正	消化器内科学
42	慢性肝疾患における腸内細菌のゲノム解析	講師	守屋 圭	
43	内視鏡的静脈瘤結紮術の有効な治療レジメの開発	講師	瓦谷 英人	脳神経内科学
44	消化器疾患における ADAMTS13, VWF の関連についての研究	学内講師	高谷 広章	
45	非アルコール性脂肪肝炎に対する Probiotics とアンギオテンシン II 受容体拮抗薬の併用による管繊維化の改善	助教	澤田 保彦	
46	筋組織におけるオートファジーの研究	教授	杉江 和馬	脳神経内科学
47	パーキンソン病患者による居住空間の評価	准教授	形岡 博史	

No.	テーマ名	職	研究者名	講座・研究領域名
46	超音波造影剤を用いた微小血管イメージングの研究	病院教授	斎藤 こそえ	脳神経内科学
47	急性期脳梗塞に対する ω 3系脂肪酸の臨床的效果に関する研究	講師	泉 哲石	
48	神経疾患の歩行解析	講師	桐山 敬生	
49	脳血管障害患者に対する機能的電気刺激を応用した新規リハビリテーション治療	講師	眞野 智生	
50	消化器癌における治療抵抗性克服を目指した新規免疫療法	教授	庄 雅之	消化器・総合外科学
51	骨髄間葉系幹細胞由来細胞シートの作製	教授	田中 康仁	整形外科
52	超音波ガイド下運動器手術機器の開発	助教	仲西 康顕	
53	アパタイトレーザー溶着により高い骨伝導能を付与した PEEK (Poly-Ether-Ether-Ketone) 材の開発	診療助教	川崎 佐智子	
		助教	稲垣 有佐	
		博士研究員	古川 彰	
54	脂質と炎症に着目した妊娠予測手法の開発	教授	田中 康仁	産婦人科学
55	大豆由来抗炎症薬を用いた化粧品、歯磨き粉、口腔ケア製品の開発	助教	赤坂 珠理晃	
56	卵巣明細胞腺癌に対する新しい治療戦略の構築	博士研究員	小林 浩	
57	卵巣明細胞腺癌に対する新しい治療戦略の構築	博士研究員	小林 浩	産婦人科学
58	卵巣明細胞腺癌に対する新しい治療戦略の構築	博士研究員	重富 洋志	
59	着色と非着色眼内レンズの違いが網膜に与える影響	学内講師	西 智	眼科学
60	緑内障が生体リズムへ及ぼす影響	講師	吉川 匡宣	小児科学
61	血液凝固第 VIII 因子およびインヒビターに関する生化学的検討	教授	野上 恵嗣	
62	ゴルフ競技後の高圧酸素療法が心身に与える影響の研究	准教授	牧之段 学	精神医学
63	微生物がアレルギー疾患に及ぼす影響の研究	教授	浅田 秀夫	皮膚科学
64	間質性膀胱炎の血液バイオマーカー開発	講師	鳥本 一匡	泌尿器科学
65	AI 技術を活用した尿路結石症自然排石モデルの確立	講師	穴井 智	
66	尿中に含まれる膀胱癌細胞に対する光力学診断	学内講師	中井 靖	
67	膀胱癌細胞ミトコンドリア内における鉄利用による抗腫瘍効果	学内講師	中井 靖	
68	腎移植レシピエントにおける腸内細菌叢の役割	助教	堀 俊太	
69	脊髄損傷や二分脊椎に伴う神経因性膀胱に対するビベグロンの効果	助教	後藤 大輔	
70	座位型ポータブル尿流量測定器の開発	助教	森澤 洋介	
71	身近な食品、健康食品、音楽商品が耳鳴に有効確認できる	教授	北原 紘	
72	ストレスではなくストレスホルモンをマネジメントする新規治療	教授	北原 紘	耳鼻咽喉・頭頸部外科学
73	頭部傾斜感覚を指標とした平衡機能検査法の開発	特任講師	和田 佳郎	学長
74	サイレント音声入力システム	学長	細井 裕司	
75	上下肢の脈波波形を用いた腹部大動脈瘤検出装置の開発	病院長	吉川 公彦	病院長
76	マイクロカテーテル挿入可能埋め込み型ポートの開発	准教授	田中 利洋	放射線診断・IVR 学
77	BEAD (ビーズ) 注入専用シリンジの開発	准教授	田中 利洋	
78	ヒューバー針用抜針器の開発	准教授	田中 利洋	
79	リポドールエマルジョン生成デバイスの開発	准教授	田中 利洋	
80	ナノ DDS を用いた肝癌に対する新規 IVR 治療	講師	西尾福 英之	
81	CT ガイド下経皮的生検針の保持器具の開発	講師	西尾福 英之	
82	経皮的生検における迅速遺伝子診断可能なマイクロチップの開発	講師	西尾福 英之	
83	IVR で使用する器具と生体曲面にフィットする形状記憶ポリマーを用いた 2 色成形構造体の開発	講師	西尾福 英之	
84	IVR における経皮的穿刺手技のロボット化へ向けた機器の開発	講師	西尾福 英之	
85	腎毒性を低減する新規ヨード造影剤の開発	講師	西尾福 英之	
86	術中排尿、排便機能モニタリングに対応した電極付き尿道カテーテルの開発	講師	林 浩伸	麻酔科学
87	DNA 修復機構から紐解く新規口腔がん治療戦略	教授	川口 昌彦	
88	口腔癌における High-LET 放射線による細胞死メカニズムの解明	教授	桐田 忠昭	口腔外科学
89	成長因子とゲル状媒体からなる顎骨壊死、顎骨髄炎、抜歯窩治癒不全の予防剤、治療剤の開発	准教授	山川 延宏	
90	微小動揺を考慮した即時荷重インプラントの最適設計	講師	柳生 貴裕	
91	顎顔面奇形の発症メカニズムの解明	博士研究員	杉浦 勉	
92	顎顔面奇形の発症メカニズムの解明	学内講師	堀田 聡	
93	顎顔面奇形の発症メカニズムの解明	学内講師	川上 正良	
94	顎顔面奇形の発症メカニズムの解明	助教	上田 順宏	
95	顎顔面奇形の発症メカニズムの解明	教授	桐田 忠昭	
96	顎顔面奇形の発症メカニズムの解明	博士研究員	村上 和宏	
97	顎顔面奇形の発症メカニズムの解明	博士研究員	山本 一彦	
98	次世代シークエンサーを用いた臓器別腫瘍遺伝子パネルとマイクロ RNA パネル解析による癌の個別化診断法の開発	准教授	藤井 智美	病理診断学
99	薬物治療前後の ADHD の事象関連電位の研究	教授	太田 豊作	人間発達学
100	5-アミノレブリン酸による前立腺癌小線源治療における有害事象予防効果、治療増感効果の検証	教授	田中 宣道	前立腺小線源治療講座
101	形成外科、創傷治療、皮膚コラーゲン繊維の配向性についての研究	准教授	浅川 勇雄	
102	十二指腸液を用いた、新規膵がん検診システムの構築	病院教授	桑原 理充	形成外科
103	慢性閉塞性肺疾患の腸内環境からみた新規治療法の開発	病院教授	美登路 昭	中央内視鏡部
104	ビタミン C 誘導体による細胞内酸化ストレスの軽減機構	病院教授	吉川 雅則	栄養管理部
105	一本鎖抗体 (scFv) を用いた機能性抗体の開発	准教授	菓子野 元郎	ラジオアイソトープ実験施設
106	一本鎖抗体 (scFv) を用いた機能性抗体の開発	教育教授	杉浦 重樹	組換え DNA 実験施設

9.22

「難病克服支援 MBT 映画祭 2021」を討議

今回の MBT 運営会議では、「MBT 難病克服キャンペーン」として、9月4日に開催した「難病克服支援 WEB セミナー」の状況、facebook/Instagram での WEB 広告試行の報告のほか、「難病克服支援 MBT 映画祭 2021」の広報及び入賞作品発表の実施計画について討議しました。

また、討議の中で、今後新たな奈良医大発ベンチャー企業も設立準備中との報告もありました。

MBT 研究所は新たな試みを積極的に行い、多くの方に研究成果を還元します。



「難病克服支援 MBT 映画祭 2021」も討議

9.30

血栓止血医薬生物学共同研究講座の報告会を開催しました

本学の重点研究点課題の一つである「血栓止血の制御に関する研究」について、血栓止血医薬生物学共同研究講座より研究成果報告会を開催しました。

本講座は、本講座の嶋教授が立ち上げに携わり、研究成果を世界に発信しています。

当日は、Web 参加とのハイブリットでの開催となりましたが、細井理事長・学長が開会の挨拶の後、共同研究講座の坂田助教等が講座での研究成果を報告するなど、活発な意見交換の場となりました。着々と研究成果が上がっており、今後に期待が高まる報告会となりました。



細井学長の挨拶



質問に答える坂田助教

10.8

MBT 感染対策支援コンサルティングを奈良医大発ベンチャー企業に認定しました

本学では、感染症センター 笠原病院教授が設立した企業を、奈良医大発ベンチャー企業に認定しました。

本学第3号の大学発ベンチャー企業となる MBT 感染対策支援コンサルティング株式会社は、医療機関や福祉施設のほか各種イベントや事業などにおける感染対策の助言や実地指導、感染対策のガイドライン作成の助言や監修、感染対策関係の商品に関するコンサルティングなどを行います。今後も感染症対策のニーズは一層高まると予想されますので、本企業の社会貢献が大いに期待されます。

アントレプレナーシップを身近なものにし、国の方針でもある大学発ベンチャーの起業を積極的に支援しています。志ある教職員の方は、ぜひ産学官連携推進センターまでご相談ください。



認定書を手にする笠原代表取締役社長

10.8

奈良先端大との連携活性化委員会を開催しました

本学と奈良先端科学技術大学院大学とは連携協定に基づき、定期的に連携活性化を図る委員会を開催しています。

今回の委員会は、Web 会議形式で行われ、今年度奈良先端大で行われた出張講義の報告や両大学の交流が活発になるよう、研究者間の交流会開催に向けての検討や、共同研究助成事業の報告会について論議を行いました。

また、委員会の中で、両大学が共同で獲得した国等の研究費の報告もありました。

今後も、両大学の交流が一層進むよう緊密な連携を図ります。



連携活性化委員会

10.10 難病克服支援 MBT 映画祭の公募を開始しました

現在 MBT では、「MBT 難病克服キャンペーン」を重点活動項目として取り組んでいます。今回、難病克服支援のための「MBT 映画祭 2021」を企画しました。

難病克服に立ち向かう人々の応援にふさわしい映像コンテンツの公募を行い、優秀作品等を広く公開し、人々の難病に対する理解を深めます。

「みんなで守るいのち」をテーマにしたオリジナル作品（最大 30 分）を 10 月 10 日～12 月 10 日まで募集しています。難病に限らず、疾病（病気）などにより患者さんやご家族に、経済的、身体的または精神的な負担がかかっている状態や、その状態を乗り越えるための取り組みに関する作品を広く募集しています。プロだけでなく、アマチュアによる作品の募集も行っており、実際のドキュメンタリー、フィクション、アニメなど、

オリジナルの動画・映画を奮ってご応募ください。詳細は QR コードからご確認ください。



詳細はこちらから

MBT 難病克服キャンペーン

受賞者報告

Winner Report

6.19

第 34 回日本腹部放射線学会において打田賞を受賞しました

放射線診断・IVR 学 医員 脇田 佑哉
(現：済生会中和病院勤務)

6 月 19～20 日、福岡市で開催されました第 34 回日本腹部放射線学会において、打田賞を受賞しました。受賞演題は「リンパ節病変を伴った子宮 adenomatoid tumor の一例」で、稀な良性腫瘍である adenomatoid tumor を子宮と所属リンパ節に認めて悪性腫瘍との鑑別を要した症例において MRI を中心に画像所見から考察を行なった内容でした。この場をお借りして吉川公彦病院長ならびに高濱潤子先生（現：市立東大阪医療センター勤務）、小林 浩先生（現：ミズクリニックメイワン 院長）、病理診断学講座内山智子助教のご指導に感謝申し上げます。

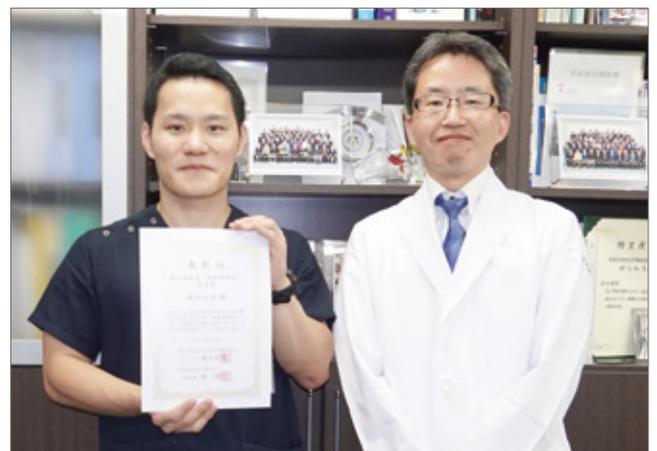


6.26

第 232 回日本内科学会近畿地方会で若手奨励賞（優秀演題賞）を受賞しました

脳神経内科学 後期研修医 嶋田 大祐

6 月 26 日、WEB 開催となった第 232 回日本内科学会近畿地方会における若手奨励賞セッション（口演発表）で、本学脳神経内科学講座の嶋田大祐後期研修医が、演題「眼瞼下垂、視力低下を呈し前立腺癌骨転移と診断した眼窩先端症候群の一例」を発表し、優秀演題賞を受賞しました。抗リン脂質抗体症候群における舞踏運動をはじめとする神経症状発症の機序を考慮する上で興味ある症例検討でした。今後の脳神経内科診療の励みとなり、さらに臨床力向上に活してくれるものと考えます。



Winner Report

7.4

第30回日本小児泌尿器科学会総会 において会長奨励賞を受賞しました

泌尿器科学 助教 森澤 洋介

第30回日本小児泌尿器科学会総会において会長奨励賞をいただきました。演題名は、「総排泄腔遺残症の生殖器機能の長期的管理」です。総排泄腔遺残症は、小児期のみではなく、思春期から青年期にかけて生殖器機能のトラブルを抱えることが多く、小児泌尿器科・小児外科のみではなく、成人泌尿器科や産婦人科との連携が欠かせません。本邦では年間10 - 15人の希少疾患であり、学会等を通じて臨床経過を報告し、情報共有を行うことは重要だと考えています。

本受賞は、東京都立小児総合医療センター泌尿器科佐藤裕之先生をはじめ、多く方のご指導・ご支援を賜りました結果と考えております。この場をお借りして、皆様方に厚く御礼申し上げます。



7.14

日本生物学的精神学会 学術賞を受賞しました

精神医学 学内講師 山室 和彦

この度、Nature Neuroscienceに掲載された「A prefrontal-paraventricular thalamus circuit requires juvenile social experience to regulate adult sociability in mice」を評価して頂き、日本生物学的精神学会 学術賞を受賞することができました。これは幼少期逆境体験(幼少期社会隔離マウス)が前頭前野-視床室傍核回路に影響を与えることをオプトジェネティクスやDREADD、ファイバーフォトメトリー、ホールセルパッチクランプ法などの技術を駆使し検証したものになります。また同神経回路をオプトジェネティクスによる活性化で、幼少期隔離マウスでみられる社会性の障害を改善できたことが何より評価をしていただいたポイントだと思っております。この論文はマウントサイナイ医科大学に留学中での仕事であり、留学先のラボのPIである森下先生に感謝申し上げます。また、精神科の諸先輩方が臨床研究だけでなく基礎研究にも力をいれ、業績を蓄積してきたからこそであると思います。この場をお借りして皆様に深く御礼申し上げます。また、これを励みに今後も研究に精進して参りたいと思います。最後に、いつも支えてくれている妻にもこの場を借りて感謝したいと思います。



8.24

第28回中島佐一学術研究奨励賞 の授賞式を開催しました

今回の受賞者は精神医学の紀本創兵講師(現:和歌山県立医科大学 神経精神医学教授)、眼科学の西 智講師の2名で、受賞者にはそれぞれ賞状、記念品の楯及び研究奨励金が授与されました。

今年度も新型コロナウイルス感染拡大予防対策のため、会場での参加人数を制限し、その模様については、オンラインでの同時配信としました。

表彰式後、紀本講師が「精神疾患の認知機能障害の神経基盤に対するトランスレーショナル・リサーチ」、西講師が「網膜・脈絡膜構造の比較による弱視要因の解明と治療時期の検討」と題して講演が行われました。

この賞は、故中島佐一名誉教授のご遺族からの寄附金を財源として、医学の学術研究に優れた業績をあげた本学の若手教員に授与し、さらなる研究の発展を奨励することを目的としています。

毎年、各所属に応募要項を案内していますので、若手教員の積極的な応募をお待ちしています。



紀本講師



西講師



中島佐一学術研究奨励賞の授賞式

8.24

第10回奈良県立医科大学女性研究者学術研究奨励賞の授賞式を開催しました

当賞は、優れた研究成果を挙げた女性研究者を顕彰し、将来の学術研究を担う優秀な女性研究者の育成と男女共同参画の促進等に資することを目的に、平成23年度に創設しました。

今回の受賞者は、皮膚科学講座の西村友紀助教で、授賞式にて賞状、記念品の盾及び研究奨励金を授与しました。授賞式後、西村助教により「①再発性帯状疱疹の臨床的、免疫学的特徴の研究②薬剤性過敏症症候群における重症度予測マーカーとしての血清 TARC 値の有用性の研究」と題して講演を行いました。



西村助教



女性研究者学術研究奨励賞の授賞式

9.10

第32回日本末梢神経学会学術集会で学会症例報告賞を受賞しました

脳神経内科学 大学院生 井口 直彦

9月10～11日に和歌山でハイブリッド開催されました第32回日本末梢神経学会学術集会で、当科大学院生の井口直彦先生が「超音波検査で早期から神経根飛行を評価しえた帯状疱疹に伴う右上肢運動麻痺の一例」を発表し、見事学会症例報告賞を受賞しました。MRIと超音波の画像を同期するVolume Navigation機能を用いて末梢神経病変を評価した画期的な研究でした。今後の研究の発展に期待しています。



The donation person name

寄附者ご芳名

「未来への飛躍基金」にご協力いただきありがとうございました

基金創設以来、令和3年9月末で累計3428件のご寄附をいただいております。

なお、今号では、令和3年7月～令和3年9月にお申し込みいただいた方のご芳名を掲載させていただきます。

【個人】

◆100万円以上

伊藤 和男 様 坂本 光章 様 宮野 淳 様

◆30万円以上100万円未満

浅田 秀夫 様 植田 充治 様 熊田 幸江 様
 小林 浩 様 齊藤 守重 様 嶋 緑倫 様
 鈴木 秀夫 様 田中 康仁 様 鄭 致元 様
 中垣 滋央 様 中林 仁美 様 橋本 俊雄 様
 畠山 金太 様 細井 裕司 様 三浦 幸子 様

掲載を希望されないご寄附者様 3名

◆10万円以上30万円未満

岩田栄一郎 様 金森 正明 様 岸元 慈 様
 北原 紘 様 久下 博之 様 新熊 悟 様
 坂野 公彦 様 久永 學 様 朴木 寛弥 様
 堀 謙輔 様 牧之段 学 様 峯 克彰 様

掲載を希望されないご寄附者様 6名

◆10万円未満

井上 信明 様 小林 恭代 様 近藤 秀明 様
 趙 晶 様

掲載を希望されないご寄附者様 11名

◆金額の公表を希望されないご寄附者様

太田 一郎 様 鎌田勝三郎 様 川上あずさ 様
 鬼頭 卓子 様 杉江 祐子 様 竹川 隆 様
 鳥塚 通弘 様 吉治 仁志 様

【法人・企業】

医療法人 二昌会 様
 医療法人 カワサキ内科 様

ご寄附いただいた方のご芳名については、本学「未来への飛躍」基金HPにも掲載しております。
<https://www.narmed-u.ac.jp/~hiyakukikin/>



令和4年度 入試日程【医学部】

大学入学共通テスト実施日 令和4年1月15日(土)・16日(日)

学 科	入試区分	募集定員	出 願 期 間	試 験 日	合格発表(予定)
医 学 科	推 薦*1	38	令和3年12月15日(水)～12月17日(金)	令和4年2月5日(土)・2月6日(日)	令和4年2月15日(火)
	前 期	22	令和4年1月24日(月)～2月4日(金)	令和4年2月25日(金)・2月26日(土)	令和4年3月8日(火)
	後 期	53		令和4年3月12日(土)・3月13日(日)	令和4年3月22日(火)
看護学科	推 薦*2	35	令和3年11月1日(月)～11月4日(木)	令和3年11月21日(日)	令和3年12月14日(火)
	前 期*3	50	令和4年1月24日(月)～2月4日(金)	令和4年2月25日(金)・2月26日(土)	令和4年3月8日(火)
	後 期		実施しません		

*1 医学科学校推薦型選抜は緊急医師確保特別入学試験13名と地域枠入学試験25名を実施します。

*2 看護学科学校推薦型選抜は地域枠のみ募集します。

*3 看護学科一般選抜(前期日程)は、一般枠40名と地域枠10名を募集します。

詳しくはホームページで確認してください(<http://www.narmed-u.ac.jp/university/nyushijoho/index.html>)

看護学科学校推薦型選抜学生募集要項は9月下旬から配布中です。医学科学校推薦型選抜学生募集要項は11月中旬、その他の募集要項は12月上旬から配布予定です。

Media Listing Information

新聞・雑誌・テレビ等マスコミの取材、テレビ出演、記事を掲載された教職員・学生を紹介します。

日付	媒体	対象者	掲載概要
2021年 7月20日	読売新聞 医なび	整形外科学 教授 田中 康仁	変形性足関節症について
7月28日	読売新聞 病院の実力	放射線腫瘍医学 教授 長谷川正俊	コロナ禍におけるがん診療について
8月6日	奈良テレビ「ゆうドキッ！」	感染症センター センター長 笠原 敬	社会福祉施設向けにクラスター阻止研修会を開催
8月7日	読売新聞		
8月10日	奈良新聞		
8月16日	週刊東洋経済2021年8月21日号	公衆衛生学 教授 今村 知明	病院再編についてコメント/医療資源の偏在課題とされてきた病院再編は進むのか
9月1日	公私病連ニュース	公衆衛生学 教授 今村 知明	著書「“中堅どころ”が知っておきたい医療現場のお金の話」が紹介されました
9月7日	日経バイオテック	未来基礎医学 准教授 森 英一朗 脳神経内科学 教授 杉江 和馬	神経変性疾患における相分離制御破綻の機序解明—ALSなどの神経難病の病態解明に光—
9月9日	日刊工業新聞		
9月9日	QLifePro 医療NEWS		
9月9日	関西テレビ「報道ランナー」	人事課障害者雇用推進係	障がいのある方が活躍され、命を救う現場を支えている様子を紹介
9月22日	産経新聞	微生物感染症学	光触媒の新型コロナ抑制効果を実証
10月9日	奈良テレビ 「新型コロナウイルス感染防止対策の考え方とポイント 宿泊施設篇」	感染症センター センター長 笠原 敬	宿泊施設で注意すべき新型コロナウイルス感染防止対策の考え方とポイントを解説
10月16日			
10月19日	奈良新聞 「新たな時代を切り拓く奈良人」	名誉教授 吉岡 章	県立医科大学の法人化に尽力した前理事長・学長 自立経営へ「改革」推進

メディア掲載情報をお寄せください

秘書・広報室(総務課) 内線：2206

編集後記

朝晩の冷え込みも厳しくなってきましたが、いかがお過ごしでしょうか。皆様のご協力により第78号学報を発行することができました。ご協力・ご支援いただいたみなさまに深く感謝いたします。学報では、教職員の皆様からの記事を随時募集しています。記事掲載を希望される方は秘書・広報室までご連絡ください。

